

日蓮上人に關しては、君と吾れと不幸にしてその觀る所を異にすれども、是れ唯日蓮てふ一客躰に就いての見解の差異にして、是の見解の由來する各自の精神に就いて毫も乖離する所無きとは、君と吾と先づ以て互に諒とすべき所と存じ候。君は自ら特に日蓮を研究したる事無しと言はるれども、今の世に日蓮を批難する如何なる識者の言も大躰に於て君の説を出づること能はざるべし。實を言へば是の疑は吾れ自らの胸中にも存する也。されど吾は是の疑ひを解除すべき他の有力なる事情によりて、上人の人格を醇化し得たるを以て無上の喜びを感ずるものに候。好んで異を樹つるには非ざれども、君の疑問に就いて少し々述ぶる所あるは敢て君の意に反する事にもあらざるべくと存じ候。事體素より重大にして吾が信解の力に及ばざるもの多々あらむも知るべからず。他日もし其の謬りを悟り得ば、吾れにとりて此上の幸はあらざるべくと存じ候。

君が日蓮に對する批難の一つは、彼れが大乗有緣説によりて、謂はゞ國家主義の宗教を打立てむとしたりと云ふにあり。然しながら、こは一考を要すべしと存じ候。如何にも日蓮は東方有緣の小國を以て後々の五百歳に於て上行菩薩出現の

國土なりとなし、妙法は是の國土を中心とし一闍浮提に宣布せらるべしとの信念を有せしが、そは宗教を以て國家體制の一具となし、若しくは國權結托を以て立教の基礎とせむとせし世に所謂國家的宗教と同一視すべきものに非ずと存じ候。是の事の仔細は先頃本誌に掲げし「日蓮上人と日本國」てふ拙論に略々盡したりげに覚え候へば、君にも既に御領解の事と存じ候が如何にや。吾れは己れの信仰する所の眞理に無上の價值を置くことを以て宗教家の第一義と信じ、既に是の第一義を立てたる後世上の一切の事物を此中に攝取するところに宗教其物の妙用は存ずと思惟す。日蓮は是の點に於て吾が理想的宗教家に近きが如し。君の見る所如何にや。

君は又日蓮の折伏主義が主として排他的なりしを惜み、ニチエの個人主義よりもワグネルの愛の福音を擇ぶと同一の理由によりて、多くの同情を日蓮の事業に寄する能はざる由を述べ給ひぬ。こも亦極めて自然の疑ひと存じ候。是の如く疑ふは獨り君のみならず、世上の識者、宗教家等の苟も日蓮に快からざる者のみならず、斯く言ふ吾れ自らにも亦此の疑ひ無きにしも非ざる也。想ふに愛とは意志融



合の謂ひ也。精しく言へば自己の心の中に他の心を攝容し、若しくは自他互に相渾同するの謂也。かく一切己れに異なるもの、存在をも認容し、是に臨むに無限の同情を以てするを以て愛の極致とするの意味に於て、日蓮の折伏主義に幾何の愛ありしや。斯かる意味に於ての愛の福音は彼れの教理に存せしや否や。是れは獨り君のみならず、吾に於ても耻かしながら尙ほ未了の問題に御座候。一切法界を一心の中に觀せむとする佛教的唯心說、或は台家の所謂一念三千の無差別觀、若しくは妙宗獨造の知解と稱する現象即實在の事觀の妙法——是等の教理は君の既に熟知し給ふ如く、平等差別の二諦を融合して吾等の實在に深遠なる意味を與ふる其の形式に於て頗る愛の極致に似たるものありと雖も、吾れの見るところによれば、それが關はるところは主として知解の範圍に存するに非ざる乎。愛の愛たる所以の意志の活動としての融合は、尙ほ此の境地に存せりや否や。吾れ少しく惑ふ。是を以て吾れはワグネルの愛は日蓮の教理にも存せしやと問へる君の疑ひを是認し、君と共に世上の日蓮學者に向つて其の解決を希望する者に候。さりながら實を云へば是の疑問は從來吾が日蓮崇拜の因縁に於て多くの重み

を有せしものには非ざりき。吾れは唯客觀的に見たる信仰、もしくは教理の實質を外にして、形式上より日蓮の人格に就て其の崇高偉大を讚歎せるに候ひき。茲に形式的と云ふは少しく語弊あるが如し。然しながら釋迦にまれ、基督にまれ、其の教理の悉く今日の學理的批判に勝ゆべしとは、恐らくは何人も思はざる所ならむ。取も直さず、其の人格の崇拜は形式上に憑據するもの多きを知るに足るべし。是の意味に於て吾が日蓮に對する崇拜を形式的なりと云ふに於て、吾れは何の異存も無之候。這般の斷案少しく概括に失するが如し、或は他の誤解を招かむことを恐ると雖も、細説の遺無きを如何にせむ。唯々君の判讀を希ふの外無之候。

是の如く述べ來りて尙ほ日蓮の爲に一事の君に言ふべきものあるを思ふ。そも、日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は廣大なる攝受の準備として、一種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎。吾等の見る所によれば、個人としての日蓮は眞に慈悲深き人なりき。所謂柔情俠骨並び具はるとは眞に彼に於て見る所の性格にて候ひき。去りながら既に天下の民衆に對し、妙法弘通の大導師として立ちたる彼れは、妙法的理想に基づきて是の民衆を改造せざるべか



らず。彼れは釋尊に對する絶對的歸依の結果として法華爾前の諸宗門を邪教と斷じ、隨つて其の謗法を破摧するを以て濁世救護の第一事と爲しぬ。是に於てか其の事業の第一着手として嚴烈なる折伏の要を見る所謂自然の勢には非ざるべき乎。折伏は攝受を豫想してこそ始めて意味もあれ攝受は即ち慈悲の用に外ならず。即ち日蓮の宗義よりして見れば大なる折伏は大なる慈悲を待つて初めて現はれ得べきものには非ざる乎。彼れが涅槃經の文句に擬して、『一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦也』と謂ひ、又『二十八年の間他事なく南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れむと勵むは此れ即ち慈母が赤子の口に乳を入れむと勵む慈悲也』と謂へるもの斯くして初めて生命ある文字となり得べしと存じ候。君は是の間の消息を如何に解し給ふや。吾れは茲に佛教に所謂慈悲と基督教などに謂ふ所の愛との間に概念の差別あることを忘れたるに非ずと雖も、日蓮に就いて愛を言はむものは先づ是の慈悲を認むるの要あるべし。吾れは日蓮の折伏の蔭に大なる慈悲ありしことを疑ふ能はず。彼れが其の生國の滅亡をまでも忍受して妙法の功德を民衆に頒たむとしたるの衷情

は深く察すべきことと思ふ也。況や妙宗の教義に逆化下種など云ふ妙用ありて折伏によりて征服せられざるもの尙ほ反抗の因縁によりて救済の緒を得べしとなすが如き其の説の如何は暫く措き亦是の問題に關聯して一考すべき事と思ふは如何に。

日蓮上人に關しては言ふべきこと尙ほ甚だ多しと雖も本書の主眼は君に郷國の現状を述ぶるに存するを以て暫く詳細を他日に譲るべく候。

本邦思想界の現状に就いて何事をか君に言ひ送るとせば、そは吾が不平を書き列ぬるに外ならざるべく候。されど吾等の如き時代の畸形兒よりその不平を取り去らむは取りも直さず其の言論を取り去るに等し。吾等は此の不平を述ぶるに當りて最も尊大なるべきことと存じ候。

一言以て是を掩へば本邦の思想界は餘りに平氣に御座候。疑ふべきこと、怪むべきこと、驚くべきこと、怖るべきこと、憂ふべきことの充ち満てる此の時世に於て、彼等の餘に晏如たるには呆るゝの外無く候。舊時代の遺物たる老朽學者に就い



て云々するは吾等の勝ゆる所に非ず此の老朽學者の中に尙ほ壯年なるもの少からざるは君の知る所の如し。新進の青年學者に就いて見るも是れ唯老廢者の年若き者たるの外一も清新の理想を抱いて時世の改造に心を苦むるものあるを見ず。青年の祝福たる懷疑の味は彼等の嘗試し及ばざる所弱冠學に志してより證典死書に傾倒するの外毫も活ける人生の疑惑に逢着するの機會を得ざりしを以て三五年にして其の學を卒へたるもの早く既に村學究となり道學先生と化し丁し平板凡俗の倫理説などを振廻はして世上又疑惑なるもの存するを知らざるが如き爲するもの比々皆然らざるは無し。あゝ君よ昔者須梨盤特は三箇年に十四字を記せざりしが尙ほ佛に成りぬ。提婆達多是六萬藏を誦じて而かも無間に墮ちたるに非ずや。安住の一念を離れて天下の知識を集むるも沙上に樓閣を城くに等し。彼等空茫にして自ら悟らず偏に知を外に求むるもの吾等より見れば何ぼう無意味の事に候はずや。況してや自ら借して人に教ふるの恐を料らず年三十にも満たざるに早くも老先生の態を成して諄々乎たるに至りては捧腹絶倒の限りと存じ候。

天皇神權説は今日に於ても尙ほ青年法學者の頭腦を支配し居るは意外にも事實に御座候。祖先教に基ける國體論は國家主義と並びて倫理學者の金科玉條たるも依然として故の如し。乾燥無味なるヘルバルト等の教育學は今日尙ほ教育者の頭を苦め年々地方村夫子によりて開催せらるゝ夏期講習會には例によりて教育倫理の少年學士多く聘せられ教育社會の大問題は依然として公德養成法とか言文一致とか何々教授二十五年勤續の祝賀會とか云ふ様のものなること是れ亦申すまでも無之候。宗教は勸財と撰擧の道具に使用せらるゝの外何の活動も無く近くは本願寺の騒動の如き毫も地方豪家の相續争ひの私事に異ならず候。新佛教と云ふが如き運動は一時青年僧侶の會同の外に何の意味もなく新宗教の論議は昨年来喧しかりしがアウンハラバ濱口熊嶽乃至半僧坊長生稻荷等の繁昌の外教界又何等の新現象を認めず候。一切斯界の事眞に胸に惱みある者の眼より見れば馬牛相關せざる事のみ。要するに太平此の上も無き事に御座候。何れの邦に於ても革新の思潮は文藝の上に現はるゝを常とするは君の知らるゝ所也。此の邦に於ては然らず。文藝は徒らに凡俗なる現代を註釋し讚美し裝



飾するの外他事無げに見え候こそかへすも無念の至りに候へ。人は輒ち口を開いてトルストイを稱し、ゴルキイを讚すれども、彼等を産するに至りたる迄の魯國が現代文明に對して如何ばかりの苦悶と健闘とを経由せしやを考ふるものあらざるなり。君よ等しき者のみ等しき者を解し得べし。此の凡俗の社會に醜釀せられ、絶えて人生の疑惑に陥りしこと無き時勢の循環に、争でか彼等を解し得べき精神的素養あるの謂はれ、あらむや。唯々標榜の新奇を喜び、漫然新思潮を口にするもの、そも何等の無意義にて候ぞや。されば衰むるもの貶するもの、畢竟一時の流行にして、やがては吹く風の何處をそれと跡とも無く消え失せ候ひなむ。イブセンも然り、ニイチエも然り。吾れは彼等と共に是等の先哲を口にするに忍びざる也。ニイチエに就いては君の書にも見えし如く、到底部門的學究先生輩の窺知を許さざるものありて存す。彼を目して哲學者とし、倫理學者となし、乃至詩人、修辭家とするもの、既に人々相解する道の第一義を逸す。吾等は此の偉人の爲に知己少きことを悲むの情に勝えず候。

嗚呼君よ、文明の苦痛は斯かる時世に於て最も深く感せらるるものに非ざるか。

今の思想界の煩瑣と平和と單調と凡俗とは、何時まで吾等を欺き、吾等の精神に安慰を與へ得べしとする歟。吾は平和を持ち來せしに非ず、子をして親に離れしめ、妻をして夫と分れしめむが爲也と呼ばり得るもの、出でたるは、やがて斯かる時世には非ざりし乎。君よ、偉人の出づるまでは世は常に平和なるものぞかし、されどその平和は命なき無事也、毒酒に酔ひ倒れたるもの、眠り也。吾れは目覺めたらむ時の苦惱を想ひて、一日も早く此の平和の破却せられむことを望むの情に勝えず。眞の晴天は暴風の後に來るが如く、戰闘を経ざる平和は眞の平和には非ざる也。

所詮は人々自ら悟るの外無しと存じ候。自ら悟らむと欲せば先づ自ら疑ふに若くは無し。個人は個人の存在を疑へ。其の何の爲に既に生き、又何の爲に將に生きむとするやに就いて眞摯なる考察をめぐらせよ。是れ最も古き疑問にして又最も新しき必要也。社會も亦其の存立の根據を疑へ。殊に國家は其の憲法と法律と廣大なる版圖と強盛なる軍備とを擁して何の爲に存在するか、又存在せざるべからざるかを疑へ。個人も社會も國家も先づ其の天分に就いて明白なる覺



悟を有するに非ざるよりは、一切の行動すべて無意義に終らむのみ。畢竟デカルトの哲學の如く、吾等は先づ自己の存在に關する自覺を喚び起して、茲に其の立脚の地盤を確めざるべからず。君よ、斯の如くにして世に多くの驚きと疑ひと苦みと惱みとあらむ。唯是の驚き疑ひ苦み惱みありてこそ初めて眞摯なる人生の解釋はあり得べし。君の所謂の愛の福音も亦是の如くにして初めて宣傳し得む。兎も角も吾れは吾が思想界の平氣を以て其の根本的病弊と思惟する也。君は如何に思ひ給ふや。

七月五日の君の御書は是の狀を認むる數日に落手仕候。英皇不豫の事に關して大英國の前途を豫想せられたる仔細は、又あるまじく割切痛快の御論と奉存候。ミセス・ベサントの印度帝國に就いての演説を假りて我邦にあらしめば如何。吾等は是の想像によりて一の大なる教訓に接したるの感無き能はず。全帝國の空前絶後の誇りとする戴冠の鴻典を目して無益なる觀世物と罵倒し、苟も國家の大職に對する明白なる自覺に基かざる一切の權勢と榮華とを無意義と貶して大帝

國主義に心酔せる英國上下の人心を警覺するあたり、抑々何等の痛快ぞや。而して帝國主義の政府が此の如き言論の自由を容認するの雅量もさることながら、是の國民的虛榮心に對する大打撃に對して、大喝采を酬ひたる國民に到りては、覺えず拍案三歎を禁じ得べからず候。げに君の言はるゝ如く、英帝國の大いなるは其の殷富に非ず、其の軍備に非ず、實に是の國民あるに依る也。君よ、試に同一の事件を移して我邦に擬せば如何。

わけて興味あるは聖ポール寺院に於ける英皇平癒の祈禱に御座候。教會の祈禱が英國の社會に於て一種の儀禮以上に如何ばかり國民の眞信に接觸せるものなりやは、吾が審にせざる所なりと雖も、君の報せられたるものゝ如きは眞に吾等の見て偉大とする所也。日の没せざる帝國の君主を病に惱める汝の僕と稱し、彼れの重患は彼れの悔悟を強めむと言ひ、彼れをして其の殘生を汝の畏れと光榮とに捧げしめよと言ふが如き、是れ即ち一切現世の虛榮を排無して、靈界の威嚴と光明とに事へしむるの一大告教也。かゝる偉大なる信念に基づきて立てられたる國家は幸ひなる哉。あゝ君よ、是を以て君主神權の上に建てられたるルイ十四世



的國家主義に較ぶれば如何。

嗚呼郷國の事傷心すべきもの何ぞ一に是の如く多きや。想ひやるだに心苦しき限りに候。神の物をも其の有となさずむば已まざるカイザルの國に於て個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に何等の價値をも認められざる也。是を以て吾れは思ふ當代文明の革新は社會の上下にゆき亘れる現世的國家主義の桎梏を打破するにあり。此の一難關にして通過せらるべくむば自餘思想界の事おのづから順風に帆かけて長江を下るの概あるべくと存じ候。言囁囁として意甚だ明かならずたゞ御推讀を仰ぐの外無之候。

君よ、吾れの國家に就いて爾かく言を爲すは主として個人の爲に候。個人の精靈は無盡藏也。釋迦出で、孔子出で、基督出で、ソクラテス、プラト、ダンテ、沙翁、ゲーテ、奈破翁出で、バイロン、ニイチ、日蓮出でたるも、個人は猶ほ依然たる無盡藏に御座候。此の無盡藏の開發する所に人生の精華あり、光榮あり。所謂人道とは是の開發の結果を中心として無限の繼續を歲時と方處に繋けたるもの、謂に外ならずと存じ候。されば是の無盡藏の開發を障害する如き生活方法はすべて人道の公敵

としてその改造を期せざるべからず。是れ將た個人自衛の本務にして同時に又當代の權利たらざるべからず。吾が先に人は自ら悟らざるべからずと曰ひしは即ち是の事の謂に外ならざることとは君の既に諒知せられたる所と存じ候。

鎌倉に移り越し候てより、はや一年にも間近くなりぬ。東京へは去年の暮このかた一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此地も思ひの外の俗地にて吾等が如きもの、永く住まらるべき處にてもあらぬにや、此頃は駿河灣清見瀨の風光寤寐の間に往來致し、會遊の感興今更の如く想ひ出され申候。何れ是の秋頃に、はかの地の客となるべきかと懸念致し居り候ひぬ。病にかゝりてより口に酒盃を接せず、眼に美色を絶ちて、此世さながら禪房の中に等し。あゝ人生酒を絶つて何によりてか行樂せむ。吾れ曾つて君に言ひ送りぬ、君還り來まさは願はくは、一夕清見瀨の海樓に痛飲し、其夜滿腔の血一斗を吐いて死なむと。君よ此語矯に似て矯に非ず、吾れは時として眞に是の如く思ふことある也。過ぐる頃臨風宇都宮より三葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば令弟潔君が主筆たる松陽新報に



して、中に君が潔君に與へたる私信を掲載しありき。吾れは君が其の私信を讀みて一種の感愴に打たるゝを禁じ能はざりき。君は其書の末に吾が事に言ひ及びかの清見瀉に快飲して滿腔の血一斗云々の吾が言葉を引きて『嗚呼是れ病に苦める憐むべき我友の聲ぞかし。予は是の友の顔を或は此世に於て再び見得ざるべきかと思へば斷腸の思に勝えず』と書き給へりき。あゝ我友よ、君も爾か思ひ給ふか、今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾れも亦是の如く思うて日々憂苦しつゝありし也。唯幸にして病尙ほ太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、尙ほ殘生の君と共に樂むべきものあらむか。唯且暮藥餌に親みて坐臥すべて意の如くならず。是の如くにしてよしや、百歳の壽を保つとも、佳人一夕の歡會に價せざるを念ふと雖も、尙ほ且つ此の生の戀々として捨て難きものあるを覺ゆるぞ、是非も無き。君よ、弱きはげに人の心なりき。

忘れもせず、三年以前の八月二十二日のことなりき。君と臨風と吾れと船を同じうして遊びくらし、扇が浦の一夜をば君は如何に憶ひ起し給ふぞや。あゝ是の三たりの友の相會して斯かる遊びを再びすることは此の世にて望み得べき事

なるか。今や臨風野州に下りて吾れは湘南に客となりぬ、彼れは身世の匆劇に處して悠遊の暇を得難く、吾れは病軀を擁して遠く動き難し。たま／＼來り訪ねらるゝも、座に酒盃なく、席に佳人無し。あゝ吾れ何によりてか、是の磊塊を放蕩せむ。來らむ年の秋には君歸り來まさむも、かゝる歡會の再びし難く、往時の忘れがたきを想へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷ますむばあらざる也。あゝ君よ、笑ひ給ふ勿れ、弱きはげに人の心にて候ぞかし。

斯かるよしなき繰言を書き列ねむは限りなき業なるべければ、終りに學界知人に就いて思ひ寄り候事共五六を録して此の趣味無き長き手紙を了るべく候。

既に御聞き及びも候半か、吾等の文科大學にては此度史學科の外國教師リス博士を解雇致され候。聞く所によれば同科には自今外國教師を備ひ入れざる方針の由にて、リス博士の補充としては先づ以て箕作元八君教授となられ候。史學科の講座眞に外國教師を要せざるに至りたらむには、本邦史學の一進歩として慶すべき事なれども、こは吾等の少しく危疑する所に御座候。吾等は素より坪井箕作



諸君の學識を疑ふものには非ざれども、博聞強記なるリス博士の缺在を補充して遺憾なきを得べきや否やは、聊か懸念せざるを得ず。言ふまでもなく西洋歴史の事たる其の史料に關し、國語に關し、又其の人情風俗習慣等に關しては、漫に本邦人の通達を容さざるものあるや論無し。本邦學士が、歴に三五年の留學によりて此等の困難を除却し得べしとは、吾等の決して思惟し能はざる所に、御座候。文科大學史學科は果してかゝる事情に打勝ちてまでも自今外國教師を要せざる迄に進歩し居るや。返へす、くも疑惑に堪えず候。不幸にして吾等の疑惑にして正當の理由を有せむ乎、本邦史學の盛衰に關する由々しき大事と存じ候。賢明なる學長並に當事者はかゝる單純なる遺算無かるべきは、吾等の萬々信せむと欲する所なれども、疑惑は遂に疑惑たるを免れず。君は如何に思ひ給ふや。

吾等更に思ふに、史學科にして若し外國教師を要せずとせば、哲學科の如き無論同一の措置に出づるを可とすべきに非ざるか。哲學科に外國教師を要するは、主として哲學史の講義の爲なること勿論也。何故に哲學史の講義が外國教師に待たざるべからざるかの理由は、取も直さず何故に西洋史の講義が外國教師の力に

依らざるべからざるかの理由に御座候。精しく言へば、其史料語學等の點に關して本邦人の容易に得難き便宜をば彼等外國教師は有すとの理由に外ならずと存じ候。況や哲學史は思想の發達に關する思索なるを以て考察思辨の力に待つ所多し。是を西洋歴史が客觀的事實に關する所の多大なるに比すれば、本邦人の是を學得すること遙に容易なるものあるべし。されば若し文科大學の方針が漸次外國教師を除去するにあらば、次には必ず哲學科教師の解備を見るべきこと、存じ候。君は是邊の利害を如何に觀給ふや。

本年度留學生三十餘名は例によりて發表せられ候。是の事に就きて注意すべきは、從來學校を出たばかりの新學士の少からざりしに反して、今回は概ね既に各官立學校の職員となり居れる故參の顔觸なること、從來文科方面にては哲學關係の留學生尤も多かりしに今回は一名も無きこと。或は從來極めて例少かりし史學科の留學生を三名までも出だしたること等に可有之候。新聞紙は是の撰抜に關して情實多かりし由を報ずれども如何にや。唯吾等の心附ける二三の遺憾を言は、高等師範學校より上田敏君を出ださざりしこと、若しくは文科大學より内



田銀藏君を送らざりし事等に候。上田君の詞藻は餘り感服せざれども其の語學のタレントは當代稀有と稱すべきもの、恐らくは英文學科の出身者中君の右に出づるもの無かるべしと思ふは決して吾等が私見のみにはあらざるべし。同君の奉職せる高等師範學校にして若し英語研究の爲に一名の留學生を撰拔せむと欲せば無論同君を推すべきに餘り名聲なき某氏の是に代りたるが如きは頗る遺憾と謂はざるを得ず。内田君は留學の撰には入りたれども、そは歸朝後廣島高等師範學校の教授たるべき約束の下に於てなりと聞く。是れ亦吾等の恐らくは君も亦遺憾とする所なるべし。其の學風に於て其の學殖に於て將た又學者たるの品性に於て内田君の如き人當今幾人ありや。同君の如きは實に將來の大學教授として殆ど模範的人物と謂ふも不可なし。文科大學は氏の如き才を收容せずして抑々何人を收容せむとするや。厘に中等教員の養成所たるに過ぎざる高等師範學校の如きは到底氏の驥足を伸ばし得べき地に非ず。吾れは是の事に就いても例の忌はしき情實談を耳にしたれども筆にするだに厭はしきことなれば省きぬ。要するに留學生の人才鑑識に就いてイマ一層の用意を當事者に望むは決して不

當の要求に非ざるべしと存じ候。

丁酉倫理會に對しては近來多くの興味を有たざれば其の近況も亦おのづから審かならず候。曾つて中島桑木二君の提論の下にニイチエの研究ありし由は聞きたれども其の所謂る研究の如何なるものなりしかは聞知し及ばず。畢竟かゝる問題は部門的學究先生に鹽梅せられむには餘りに多くの非學究的分子ありたるべきを蔭ながら懸念罷り在り候ひき。哲學雜誌廣告によればザラトストラ如是説と道德發生論とに基づきたる桑木君の一著述あり題してニイチエの倫理説と稱する由。あゝ吾等の關はるところは説に非ずして人也。桑木君何ぞ其の所謂る倫理説より一步乃至百歩を進めてニイチエ其人を解説することを爲さるや。そもくニイチエに學説なるものありしや否やは暫く措き此の誤解せられたる偉人に對して懺悔の意を表せしむるの道唯其の人物に對して深厚なる同情を寄せしむるの外無之と存じ候。げに君の言はれし如く愛は理解せしむ。唯此れ是の道人々相解するの道と存じ候。

去冬以來芥舟臨風竹風醒雪諸子と兩三回相會せし外殆ど絶えて先輩知友に面



せず。當地にありては時々田中智學氏と來往するの外、山に面して書を読み、海に臨みて嘯くの外、他事なく候。是の如くにして朝々又暮々、徒らに歳時の水の如く流るゝを送るのみ。近來久しく新書に接せず、心少しく飢えたるの感あり。あゝ吾等は何時まで讀書子たらざるべからざる乎。歎嗟の至りに御座候。

書送りたき事は何時迄書きたりとして盡き間敷候まゝ、惜しき筆を茲に擱き申候。今朝君が七月十八日夜の書翰一通と、美術雜誌二冊並に大英新百科全書一冊とを受取りぬ。御苦心の段々毎もながら謝するに辭無し。書中『街頭の樂手』の一篇感興淺からず讀過候ひしが、末段の一節特に吾が情を動かし候。

嗚呼世に棄てられて世を怨まず、人に顧みられずして人に背かず、一箇の風琴に命を托せるかの老樂手。彼れが前身の何なりしかは我れ之を知らず、彼れに罪過ありしとするも我れはそをさばく判官とならじ。又彼れの現在が如何に窮困なるも我れは必ずしもそを悲しまじ。彼れの風琴より出づる哀はれの音律は、凡ての懺悔よりも力あり。彼れが命を知り、天を樂める自得は總

ての富貴榮華よりも固く且つ貴し。

吾が言はむと欲する所亦是の外に出でじ。乃ち君が此の文を録して是の書を結び申候。今夕此時、君も或は其故郷の病友を想ふこともあらむか。吾れは此の書によりて遙に君の健康を祈りて静に病の床に就かむ。あゝ夢よ、吾等が此世に於ける最終の隠れ家よ。此の夜の眠に幸あらしめよ。

(卅四年八月十九日夜、鎌倉長谷にて)



第三期雜篇

無題錄

○讀賣紙上掲ぐるところの半古君の衣服改良案には吾人一向感心せず裁式煩瑣に過ぎて形様甚だ散漫毫も佳處ある無し。衣服は人生習慣の最も固着せるもの而して習慣は凡ての勝利者也。是の習慣を維持するは是の習慣を有する者にとりて是の上も無き衛生也。漫然空理を説いて積年の習慣を打破せむとす事太だ難し。改良論者は深く是の點に着眼せむことを要す。

○今の教育は人を造らずして徒に人の手足を造る。其卒業生は人を使役せずして却て人に使役せらる。畢竟門附せしめむが爲に人の子に三味線を教ふるもの也。藝も是に到て身を滅すもの多し。各學校の卒業期に際して吾人切に是の感を深うせり。所謂教育家果して何の辯かある。

○基督教大舉傳道の結果頗る佳良なりと傳ふ。氣早やなる論者の中には是の事實を以て人心一轉の機會なりとなす者すらあり。早やまる勿れ運動によりて

得たるものは何時運動によりて失はざるを保し難けむ。

○人心の移るは機微の間におり唯哲人のみ這般の消息を解す。

(三十四年八月)

本末の顛倒

當今史料編纂先生ありて歴史家なく哲學史家ありて哲學者なく教育學者ありて教育者なく道學先生ありて德行家なし。甚しい哉本末の顛倒せらるゝ事や。

今の哲學

ソクラテース曰く哲學は死に對するの道なりと。尚に是の究竟の安心を與へずむば宇宙の知解我に於て何爲るものぞ。知らず今の哲學訓ふる所果して何の道ぞや。

自ら欺く無くむば幸也



曾て倫理専門の新學士に告げて曰く、卿等百歳にして道義を説く可也。昨日校舎を出で、今日人の子に教ふ危からずや。人生の幽微素と文字の外にあり、讀書萬卷、自ら悟る無くむば、畢竟死學のみ。卿等自ら欺く無くむば幸也。

中心果して信ずる所ある乎

人生は事實也、空理に非ざる也。漫に主義を標榜し、學説を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先生、好で理を談ず、疑ふらくは中心果して信ずる所ありて然る乎。

學説と人格

知は易く信は難し、百知ありて一信無からむには、初めより學ばざるに如かじ。今の學者の爲す所を見るに、漫に先人を是非して折衷を事とする者多し、抑も何の呆癡ぞ。其人を知りて其説初めて解すべけむ。是の間何ぞ道學先生が皮相の是非を容れむや。而して唯々同じき者のみ同じき者を解す。道學先生の解し得る人物は、道學先

生自らに過ぎざるのみ。

人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去り、モルモン來る。去來我に於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらすして内にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否ざれば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。

(全集二卷九  
二七頁參照)

空腹高心

己れ能く先人に若かむと欲せば亦同じく先人の學びたる所を學ばざるべからず。何ぞ今の青年輩の空腹にして高心なるや。

道義亡國

唱歌には公德唱歌、菓子には教育菓子、遊戲には德育遊戲、聖代の文物又燦然たりと謂ふべし。



夫れ邦の無道を以て作る者尙起すべし。道義に溺れて亡ぶる者に到ては遂に救ふ可らず。吾人潜に以て憂と爲す。

何ぞ思はざるの甚しき

嗚呼天下好く書く者の多くして好く讀む者の少きや。情激する時語逼らざるを得ず。理絶する時理明なるを得ず。機微言外にあり。嘖嘖として唇頭に上らず。人は即ち壯語を作して他を欺くものと爲す。何ぞ思はざるの甚しき。

心に會するもの唯是れ心

理の争ふべきもの其事初めより争ふの要なき也。心に會するもの唯是れ心。要は人々自ら悟るにあり。腐儒席上の談の如き吾れに於て風馬牛のみ。

何ぞ人の異を妨げむ

理の精しからざるを怪む勿れ。精ならざるは粗ならむが爲のみ。吾れは唯吾

に同じきものを求む何ぞ人の異を妨げむ。

千萬言唯意のまゝのみ

若し偏に理を争はば吾れ不肖なり。雖も豈俄に學究先生の後に落つるものならむ。千萬言唯意のまゝのみ。區々の辨折何ぞ卿等を待て知らむや。

吾は永く吾たらむ

人はニイチエを言ふ唯願くは吾をして永く吾たらしめよ。ニイチエは天才望むべくして即くべからず。千歳に獨歩せしめて可也。

十九世紀文明の王冠

遮莫吾れはニイチエを好む。十九世紀文明の王冠として見るべきもの正しく彼れに非ずや。彼れの病的なるを答むる勿れ。十九世紀文明其物の甚だ病的なるを如何。



笑はむ乎、狂せむ乎

天才は狂し、俗物は笑ふ。吾人の社會は世々是の如きのみ。生を是の世に享く、  
そもく俗物となりて笑はむ乎、將た天才となりて狂せむ乎。

吾をして詩人たらしめば

吾をして詩人たらしめば、願くはキヨルチルたらむ。人を愛し、國に盡し、自ら甘  
す。青春の死何ぞ、夫れ美はしき。才名一世に曠くして、令聞後に冷ねし、吾れに於  
て素より間然する所無し。

唯夫れキヨルチルたる能はず、願くはハイロンたらむ。ハイロン尙ほ能はずむ  
は願くはハイチたらむ。彼れには惡魔の力あり、此には毒蛇の舌あり、尙ほ以て一  
世の俗風に甘心するを得む。

言論畢竟人物のみ

書を寄するものあり、曰く言論畢竟人物のみ、足下の近狀憐むべきが如しと。嗚  
呼果して然る乎。吾豈自ら憐むべきを知らざらむ、若し夫れ憐んで而して自ら樂む  
の境地は即ち足下等の知らざる所に屬するなからむや。

然り、言論畢竟人物のみ。吾心近來靜穩を缺く、猶ほ水平の風に亂るゝが如き乎。  
詩あり、曰く、

吾がこゝろ波にも似て碎けたるか。など圓かのまゝに寫さるる、大空高く澄  
みわたる月。

吾が文素と文に非ず、其詩亦詩に非ざる也。

(三十四年十月)

米と砂

萬物は人類の爲に造られたるものに非ず。人類は其の生存の目的を達せむが  
爲に取捨する所無かるべからず。彼れの糧は米たるべし、砂たるべからず。  
怪む人は何故に精神上の糧に於ては米と砂とを撰ばざるや。



其愚や及ばず

萬物何物か知識の對境たり得ざらむや。若し我れをして腐儒の心だにあらしめば、一塊の土石に對する百卷の著述必ずしも難事に非ざらむ。然れども是の如き知識畢竟何の用ぞ。知るべきことを知らざる是れ愚也。然れども知るまきじことを知るの愚に及ばざるや遠矣。

道學先生の世界

吾人は道徳の受賣を業とする夫の道學先生を卑む。品性の洵治は偉人の事たり。今の道學先生の造り得る人物は道學先生自らに過ぎざるのみ。假りに是の世界の人間をして悉く道學先生の如き人物たらしめば如何。吾人は魯仲連を學びて東海を踏で死せむのみ。

何ぞ一に煩瑣なる

兒童心理が教育上に應用せられざりし時代にありても、日吉丸は無事に育ちたりき。ゲイテ、ル、テルの幼時には道徳的遊戯を強むらるゝことあらざりき。當世の事何ぞ一に煩瑣なる。

口耳の學

口耳の學は口耳の人を造る。人物獨り人物を造り得べし。道學先生よ、眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、百卷の著書よりは一身の徳を修めよ、人々自ら悟らざるべからず。

罪は貧民にあり

近時貧民の惡を爲すもの、人動もすれば社會の罪を言ふ。罪は貧民にあり、何ぞ社會にあらむ。彼れ惡を爲すに先ちて既に貧弱てふ大罪を犯したるにあらざるや。強者と天才とは常に道徳を超越す。彼等より見れば仁義は弱者の武器に過ぎざるのみ。

(卅四年十月)



### 田中智學氏の『宗門の維新』

吾人は久しく田中氏の名を聞けるも未だ其の人を知らず、日蓮宗の教理沿革等に就いては素より一門外漢たり。而かも茲に氏の近著『宗門の維新』に就いて一言せむと欲するは、是の書が末法五濁の當世にありて教祖日蓮の偉大なる精神を繼紹せる所に同情を禁する能はざるものあれば也。

著者は開卷の劈頭に於て、本化の妙宗は宗門の爲の宗門に非ずして天下國家の爲の宗門也と喝破し、是れ日本國家の應に護持すべき宗旨にして、亦宇内人類の必然同歸すべき一大事因縁の至法也と唱道し、此大事縁を宣傳せむが爲に日蓮聖祖は我邦に垂化し給へりと説き、今の宗門は數百年來の歴史的腐敗の爲に全く其の本分を亡失し了りたりと慨き、聖祖の宏猷を恢復し、宗門の妙用を光顯せむが爲に、茲に宗門改革の根本義を明にせむと揚言し、而して後断じて曰く、『予は此論篇の云ふ如き宗門に非れば日蓮聖祖の宗門に非ずと爲し、又此宗門の改造は單に宗徒の間のみ唱ふべきものに非ずして日本國家の應さに大に注目すべき最高問題

也と爲すもの也』。と何ぞ其の宣言の高大にして其の意氣の猛烈なるや。吾人は先づ是の開卷第一章に感激して編を終るまで遂に手を釋く能はざりき。

著者の所謂る改革論の大綱は、宗法に於て復古的態度を採り、制度に於て進歩的態度を取り、而して全體を統率するの一大精神として、侵略的態度を採らむとするにあり。所謂る侵略的態度は日蓮の法華折伏の大義にして、著者の是に論及するや、氣魄雄大、光焰萬丈、蓋し本篇の大主眼の存する處、亦著者最得意の壇場たるが如し。其の要に曰く、人類を一妙道に歸せしむるには、先づ一大勢力を事實の上に建立せざるべからず。國家を以て道教の原動力とする教旨即ち是れ也。曰く、日本をして宇内を統一して、永く宇宙人類の靈的巨鎮たらしめざるべからず。是れ宇内清廓の爲也、人類救済の爲也、而して是れ聖祖立教の大義、天祖建國の要道にして、兼ねて釋尊塔中付囑の元意也。曰く、是の大理想を唱道したる聖祖日蓮は正しく世界統一軍の大元帥也、大日本帝國は正しく其大本營也、日本國民は其天兵也、本化妙宗の學者教家は其將校士官也、事觀高妙の學見主張は其宣戰狀也、折伏立教の大節は其作戰計畫也、信仰は氣節也、法門は軍糧也、四大格言は軍規の振肅也、本化妙宗







退讓する所あらざりき。北條氏遂に屈し、榮爵を授け美田を贈りて宗門の弘通を  
 允許し、請ふに諸宗の折伏を中止せむことを以てするや、彼昂然として曰く、日蓮の  
 教を弘むるは釋尊の遺命のみ、一北條氏の許否我に於て何かあらむ。法華折伏は  
 聖經自爾の大義救世根本の方便、釋尊の行者一日も是の事無かるべからずと。嗚  
 呼何ぞ其の主張の嚴明にして其の意志の猛烈なるや。吾人は日蓮宗に於て一門  
 外漢のみ。今に於て尙ほ法華折伏を標榜するの可否は吾人の得て知らざる所な  
 りと雖も、田中氏が二十年來内外の障礙に抵抗して終始其の主義を枉げず、斷々乎  
 として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精  
 神に感孚せる所ありと謂ふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其  
 の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き亦吾人の欽羨に堪えざる  
 所也。

嗚呼世に閑文字多し。言はざるべからずして初めて言ふもの果して幾何ぞ。

田中氏の是書の如きは眞に言はざるを得ずして言へるものか。其の説の當否如  
 何は暫らく措き、世人は須らく愛世者の最も眞摯なる憤慨録として一讀の勞を吝

むべきに非ざる也。

(廿四年十一月)

天才の出現

我は天才の出現を望む。嗚呼日蓮の如き奈破翁一世の如き詩人バイロンの如  
 き大聖佛陀の如き哲學者シンペンハツエルの如き英雄豪傑は最早や此世に出づ  
 る能はざる乎。久しい哉我の凡人に倦めることや。

天才の犠牲

○ 4 羊皮子 羊 一 狼 腹

世に凡人の數幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願はく  
 は彼等の十萬を割いて一バイロンを得む。願はくは彼等の一百万を割いて一奈  
 破翁を得む。我に一日蓮を興ふるものあらば、願はくは代ふるに一千萬の凡人を  
 以てせむ。我に一釋迦を興ふるものあらば、一億萬亦惜むに足らざらむ。  
 人よ怪む勿れ、彼の木偶に禱るもの猶且つ犠牲を供ふるに非ずや。天才にして



得らるべくは如何なる犠牲も決して貴からざる也。

### 天才無き世界

吾人の世界より天才を除き去れよ、残る所果して何物ぞ。歴史は空虚とならむ。世界は暗黒とならむ。人生は寂寞たらむ。吾人夫れ何に頼り誰を憑みてか此世に生存すべき。天才は正しく社會の名譽也、國家の寶冠也、人類の光明也。

### 平等主義と天才

平等主義は訓えて曰く、人には凡て平等の人格あれ、平等の發達あれと。是の如くにして無數の凡人は作られぬ。

天才は吾人に訓えて曰く、爾等力めて我の如くなれ。我は是れ強者と優者との先驅也と。是の如くにして天才は靈性の慰藉也、進歩の理想也、未來の光明也。

### 吾人凡て是を憎む

吾人は恐る餘りに多くの人は生まれたるに非ざる乎。凡俗至極なる平等主義は是の如くにして行はるゝに非ざる乎。天才は是の如くにして狂者として迫害せらるゝに非ざる乎。

天才の出現を沮害するもろくの教育主義、道徳主義、吾人凡て是を憎む。

### 二個の眞理

「朝に道を聞て夕に死するも可也」。是れ孔子の教なりき。

「早く其の杯を空しくせずや、其の泡の消ゆるに先ちて吾人の命の消えざること、を誰か保せしや、是れアナクレオンの歌なりき。

吾人は思ふ、是れ人生に於ける二個の最も大なる事實にして、亦二個の最も大なる眞理也。

### 偉人と凡人との別

偉人と凡人との別は一言にして盡すべきのみ。彼れは人生を簡單にする者也。



此は人生を複雑にする者也。  
 本能の命する所其處に人生の最も大なる事實あり。夫の煩瑣を以て精緻と稱し、迂遠を以て妥當と爲すもの、そもく人生直下の事實を如何と見る。  
 哲人言あり、曰く、基督教徒は世に唯一人ありき而して彼れは十字架の上に死したりきと。

價值と我

人生は價值也而して價值は我れ自らの造る所也。世に我れ自らの造らざる價值ありとすれば是れ我眼の外に色ある也我耳の外に聲ある也。  
 天下誰か我が價值を解する者ぞ。文字は上下大小是非を論すべし。價值は唯心を以て心に傳ふべきのみ。  
 他の言動によりて左右せらるるものは是れ既に價值無き也。價值無きものは是れ既に我無き也。我既に没しぬ人生の意義亦求むべからざる也。

惡を憎むこと何ぞ甚しき

進歩の旗章は多く革命者流の頸血に染められたりき。而して革命者流は概ね當代の元兇たりき。世間何ぞ惡を憎むことの爾かく甚しき。

癡狂院

世界は惡者に負ふ所あるが如く、又深く狂者を徳とせざるべからず。  
 ナザレの故園に歸り、以賽亞六十一章の破題を吟じて、是の録るされたる事今日汝等の前に應へりと呼びし時、誰かイエスを狂者なりとせざるべき。龍の口に引かれむとするや、赤橋の前に立ちて八幡大菩薩の緩急を罵りたる時、日蓮を狂者と思ひし者は獨り彼の法敵のみに非ざりき。彼等をして今の世にあらしめよ癡狂院裏の一患者として待遇せらるるの外、何處にか救世主あらむ何處にか釋尊の行者あらむ。

謹する者曰く、癡狂院は是れ無數の凡人が其の平等主義の保護の爲に設けたる



恰好の武器也。好談話亦多少の真理無しとせず。

### ニイチエの批難者

◎世に天才を解し得ずして是を批評するほど笑ふべきことは無い。今のニイチエの批難者の如きは大抵是の類だ。

◎讀賣に馬骨人言と云ふのを書いて居る匿名先生があるが連りにニイチエの攻撃をやつて居る。何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが超人や轉生などの事になると流石に俗學者の知解に入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチエを批評し得らるゝものならば世に批評ほど容易なものはないよ。

◎自體ニイチエは學者では無い隨て其の言ふ所を學說などゝ見るが抑々の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想學說以上の想像謂は人間靈性の呼吸を以て直に人の肺腑に通ずるにあるのだ。それを俗學者流が自家の歴史論や倫理

見などに據りて彼れ此れ言ふのは何たる間違であらうぞ。斯かる俗學者流に一大頓悟を與へむが爲に取も直さずニイチエは生まれ出たのである。

◎讀賣の馬骨先生はやれ個人主義が如何だのやれ歴史的發達が如何だのやれアナクロニズムがあるのやれ盲目反動だのと是迄の俗學者の言ひ腐らした事を珍らしげに陳べて居るが是れでニイチエが解つた積りで御自分は居らるゝのか。ニイチエ二代に三段の變化杯と人並の事は言つて居るがなんで斯かる先生に其の様なことが解らうぞ。ハヅロック、エルなどのお里が見え透く様で何共以て笑止に至りだ。

◎其の癖やれニイチエはゲータを讀むたことにはあるまいの、ルソーは恐らく解らなかつたらうのと齒の浮く様な通を並べらるゝが英譯で、ファウストを窺つたとして何で是れがゲータ通と謂はれやう。況して他人がゲータを讀むたの讀まぬのと詮義立ては人の手前テト御控へなさるゝが宜しからう。斯むな無用の辯を弄する暇があるならばニイチエの妹さんの書いた傳記やザラッストラでも熱讀なさるゝが御爲だよ。



○扱て其の言ひ方の輕薄さ加減と來ては目も當てられない。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの未派でもあらうが御師匠様の諷刺の筆が如何に輕妙だからとて斯かる問題にまで下手に眞似られては如何にも人品が見え透く様で御爲になるまいと思はれるのに。

### ニイチエの歎美者

○我輩はゲーテやバイロンやハイチや日蓮や一世奈破翁を歎美すると同じ様にニイチエを歎美する者である。ニイチエは前にも言へる如く學者ではない況して實踐道德家などでは猶更無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること其の想像の偉大なることは殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の悪文明に育てられた吾々にとりて此の上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。

○世にはニイチエの歎美者と謂へば直に其の所説の實行者として驚怖する者があるがまあ何と謂ふ馬鹿氣た事であらう。如何にゲーテの歎美者だとして自らフ

ウストたり得る者があらうか如何にバイロンの歎美者だとしてマンフレッドやサルダナパラスが眞似らるゝものであるか如何であるか。ハイチや日蓮の通りにしては一日も是の國には居られまい。奈破翁を眞似たらば恐らくは直に巢鴨に送らるゝであらう。

○吾人が天才を歎美するのは吾人の精神的生活を豊富にし是によりて自ら慰め自ら勵みかねて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗學者流の生活する世界以上に於て吾人の理想的天地を建設するの希望は是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ且勵まざるゝのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し吾人の信仰を堅むるのだ。是の間の消息は歴史論やアナクロニズムでニイチエを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬのは言ふまでも無いのである。

(廿四年十一月)

### 自然の兒



吾等は是の如き言の或は世に誤られむことを恐る。されど吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。

何か故ぞ

世に若き女の容つくれるばかり美はしきは無し。彼れ何が故に其の容を装ふや。野に咲ける百合の花を見よ。ソロモンが榮華の極みだにも其の榮え是の花の一つにも及ばざりき。花や何が故にしかく麗はしき。鳥の樹間に歌ふとき彼れ何の情ありて其の歌のかくは妙なるや。黄金色なる木の實の枝も撓はなる熊の如何にうるはしきよ。木の實はた何の心ありて寂しき秋に獨り打ち笑める。

貴き哉是の賚

人よ自然の大なる力の是の間に活らけるを見ずや。是の力無くば人には若き女の笑顔なく野には花の色の美はしきなく森には鳥の歌の妙なるなく春はさながら秋の如くにして世は限りなき沙漠の如くならむ。大なる哉是の力貴き哉是

の賚。吾人に祈るべき神なくむば願くは先づ是の自然の大なる賚を讚美せむ。

性 慾

怪しき哉是の大なる貴き賚の吾等の社會に賤めらるゝ事や悪魔の如く咀はるゝに非ざれば其の名決して彼等の口の上らざる也。彼等胸に是の賚を抱けどもそを隠すことさながら盗める物の如き也。斯くてあらゆる悪名は是の賚の上に被らせられぬ。真理の外に何物をも知らずと稱する科學が名けて性慾と呼べるもの、あゝ是れ彼等が是の賚に與へたる最も美はしき稱謂なりき。良しさらば吾等亦暫らく是を性慾と名けむ。

何ぞ其の祝福を讚美せざる、

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。自然の兒には常に兩面の刃あり。人は何故に其の害毒を呪咀して其の祝福を讚美せざる。

性慾の動くところ



吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。夫の性慾の發動の醇なるものは眞にこれ天下の至美、人生の至樂也。性慾無きところに人生幾何の價值ありや、吾等まことにそれを疑ふ也。彼等に詩ありや、愛ありや、將に美ありや。青春の妙樂、彼等果してそれを解するや。吾等まことにそれを疑ふ也。たとへば一脈の春風、吹き亘りて野に生色あるが如く、たとへば微妙の音樂に神往きて限りなき歡喜の中に漂ふが如く、たとへば妙香、薰じ天華、雨に中る身は無上淨樂の三昧に入るが如く、性慾の動くところ、野には春色あり、空には妙光あり、人には愛情あり。天地と人生と、茲に初めて美なるを得るに非ずや。

地獄の火印を烙けられたるもの

夫の春と年若きとを欲ぶ人は、何にぞ性慾の美はしきを稱へざる。吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。彼の性慾を禁遏し若しくは力めて卑下するもの、其面に色無く、其の眼に光無きを見ずや。さながら地獄の火印を烙けられたるもの、如く、其額には蛇の如き皺あるを見ずや。彼等笑はざるに非ず、されど其笑ふ聲

に空洞の響あるを聞かずや。彼等はげに知博く、徳高く、行正しく、若しくは財裕かなる人なるべし。されど吾等は疑ふ、是の如くにして世に尙ほ望むべき榮えありや。人は己れに克つと謂ふ、されど性を矯むるは天を傷くる也。善か悪か、吾れ是を知らず、ただ人生の福祉是の如くにして空しかるべきを想ふのみ。玉の盃の底なきものに用ふべからざるを如何。

性慾の醇化

げに慾也、飽き足らずむば已まざるべし。されど喩へば、火は暖むれども觸るゝものを焼くが如く、樂は遠きにありて聞くべきが如く、色は水に和して染むべきが如く、性慾の美はた其の飽足せられたる所に在らずして、それを憧憬するところに存すべし。吾等假りにそを性慾の醇化と名けむ。

久しい哉自ら欺けることや

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。是の如きをしも賤むべしとせば、世に



何の貴むべきものありや。名けて色情と呼ぶ可淫慾と稱する亦妨げじ唯是をしも耻とせば世に何の誇るべきものありや。異世他界の知識をだも人は尙ほ貴しとして求むるに非ずや。この自然の欲求を羞耻として忌避するの謂はれ何處にありや。げに没趣味没風韻の世とはなりにけり。されど人は其根を艾りて其の花の美はしきを望むべきに非ざるべし。久しいかな風俗社會の自ら欺くことや。

價值也、名目に非ざる也

吾等は想ふ若き女は容つくるべきもの也。何にぞ今の女學生の其の髮蓬の如くなるや。かの裸體畫を眺むるもの何故に其の膚の柔かにして其の息の香しきを想ふべからざる乎。劣情と云ひ實感と叫ぶ暫らく人の名くるに任せむ。吾等自然の兒の關はる所は價值也、名目に非る也。

眞の教育、眞の道德

嗚呼自然の最も大いなる資は久しく磨かれずして埋れたり是れまさしくまこ

との教育とまことの道德との關はるべき最も大いなる問題に非ざる乎。人は長へに其の罪を遂ぐべきに非ざる也。  
(以上廿四年十二月)

病と醫學

トルストイ伯病みし時幾多の醫師其病を審にせず。伯乃ち歎じて曰く今の醫師は醫學に於て知らざる所無し唯醫學其物は何事をも知らざる也と。味ある哉言や。希くば以て今の道學先生を戒めむ。

中江兆民居士

◎去月中旬中江兆民居士遂に逝きぬ。人の壽は歳月に非ずして事業にあり。五十年は居士にとりて決して短き生命に非ず。遮莫吾人の最も居士に欽する所は性命の外に超然として其の末日の平和の極めて美はしきにあり。居士夫れ那邊より是の赤心の地盤を得來りたる。



◎理を言は、死は爾かく怖るべきものに非ざるべし。吾人は既に百歳の過去に生まれざるを悲まず、何ぞ獨り百歳の未來に活きざるを恨みむや。死怖るべしとは何の謂ぞ。

◎生死は常に處を異にし、長しへに接觸するの期無し。吾人死せむ乎既に生きざる也。吾人生きむ乎未だ死せざる也。生者にして死を恐るゝは死者にして生を欲すると一般能はざるを望むものに非ずや。

◎想ふに怖るべきは死其者よりも死を期待する心に存すべし。然れども既に死を知らず、又何ぞ死の怖るべきを知らむ、知らずして徒に憂悶す、畢竟迷妄ならむのみ。

◎假りに古の勇者を墳墓の中より起して而して問へ。彼れ其の平和なる永眠を捨て、再び是の濁世に出で、戦はむことを望むべきか。

◎天下の最も怖るべきものは不能死の觀念に過ぐるは無し。百年、千年、万年、而して猶ほ死する能はずして長へに是世界に生息せざるべからざるの運命を得たりとせよ。誰か慄然として寒心せざらむや。吾人は人生の最も大いなる幸は其生命の不朽ならざる事に存すと謂はむ。

◎生の覺悟は即ち死の覺悟也。哲學宗教は死の學問也。是の人生の一大事、因縁に關して爲すあるに非ずむば、一切の道教學智、吾人に於て何爲るものぞ。吾人は是點に於て兆民居士を大なりとす。

### 道學先生の理想的人物

今の道學先生の理想的人物となる易々たるのみ。人に遇ふて説く所、徳教振作の論に非ざれば、則ち風俗改良の談。讀む所の書は教育倫理書く所の文は言文一致、夢にも風流韻事を語らず、時に豚を煮て、晚酌三杯、興大に到れば、則ち公德唱歌を歌ふ。唯夫れ是の如くにせば可ならむのみ。

### 教科大學

教科大學の設立を説くものあり、曰く以て宗教の頹廢を救治せむと。誤れる哉



學說によりて信仰を求め、野に行いて魚を採るが如けのみ。今の宗教界に要するものは知解以上の人物也。學說文字は既に其の多きに勝えず。

若し夫れ教學研究の爲に一大學を起すが如きは寧ろ閑事業と謂ふべし。歐洲大學に神學科あるは、中世四科法の遺物のみ。移して則とするの謂はれ無きや論無し。

三十五年一月

### 麵包の比較研究

今の時宗教學者ありて宗教家無し。所謂る佛教の比較研究の如き學術の爲には喜ぶべきも宗教其物と何の關する所ぞ。飢えたるもの、求むるは麵包也、麵包の比較研究には非ざる也。

### 迷信と眞信

數々人の迷信を説くを聞く然れども吾人は疑ふ、世果して迷信なるものありや。又果して迷信ならざるものありやと。

信せざる者より見れば、一切の信仰悉く迷信のみ。信する者より見れば、一切の信仰是れ眞信のみ。半僧坊、穴守、稻荷、成田不動、阿吽、波羅婆等の崇拜を以て迷信とし、佛教、耶穌教の信仰を以て眞信なりとするが如きは、是れ對峙的名目の争のみ。彼此處を換ゆれば、迷眞亦名を異にせむ。世人動もすれば合理的信仰を謂ふ、誤れり。既に信仰と云ふ、豈合理的なるものあらむや。若しあらば、是れ最早や信仰に非ざる也。信仰は元始的事實也。眞偽なく、是非なく、上下なく、優劣なし。偶々是ありとするも、方便的稱謂に過ぎざるのみ。

### 麵包を求めて石を得たり

吾人は靈性の安慰の爲に、宗教を要す、而して今の學者與ふる所は、宗教の學說のみ。吾人は理性の平和の爲に、哲學を求む、而して今の學者供ふる所は、哲學の歴史と認識論のみ。吾人は吾人の人格の修養の爲に、道德を要む、而して今の學者の訓ふる所は、倫理學の理論のみ。米を求めて砂を得たり、麵包を求めて石を得たり。



り。嗚呼夫れ飢えたるものを如何せむや。

先づ人たらむことを要す

今の學者口ありて手無く言説ありて實行なし。畢竟識の貴きを知りて人生の更に重すべきを解せざるの弊に坐す。

學者たる可也然れども先づ人たらむことを要す。然らざれば萬千の知解も半銭の價値無けむ。

年若き人よ

年若き宗教家よ爾かく世を果敢なむこと勿れ。善く食ひ善く飲む是れ人生の事實に非ずや。

年若き哲學者よ爾かく世を難むする勿れ。理の争ふべきもの初めより争はざれ。吾人は美酒に對して先づ其泡を吹くに非ずや。

年若き教育家よ爾かく吾人の言に眉を擧むる勿れ。罪無きものは恐れず恐る

ものは疾しければ也。人は焼かれむことを慮りて其火を怖るべきに非ざるをや。年若き道學先生よ爾かく善惡を以て心を勞せざれ。かの流沙に沈むもの見よ自己の叫びの爲めに自ら溺るゝに非ずや。

事後の註釋、理前の是認

人よ何ぞ汝の争を止めざる。古より趣味に争ひ無しと稱せらるされど吾人の人生は趣味の争に外ならざるに非ずや。

理論は事後の註釋のみ事實は既に理前に於て是認せられあるを知らずや。

菅公一千年祭

久しく計畫せられたる菅公一千年祭はいよ／＼本年に於て施行せらるべし。九州に於て西京に於て、東京に於て、其他全國の到る處に於て祭禮好きの國民は狂氣の如く騒ぎ立つなるべし。當事者たるもの能く是の祭典の目的を明にして無意義の騒動に終らざらしめざるべからず。



我國は祭禮を好む然れども其の何の爲の祭禮なるかを知らざるもの多し。大祭日の如きも天長節、紀元節、孝明天皇祭等を外にして其の祝すべきの意義を知るもの極めて稀なるべし。彼等はたゞ、業を休み爲す事も無くして一日を遊び暮らす特權あるを以て祭日を祝すべしと思惟せるならむ。

怯夫に非ざれば即ち僞人

人性は爾かく圓滿なるものに非ず。吾人今にして神たらむは早からずや。強ひて達はざるを求め方めて戻らざらむを街ふも省みて安からず。即ち性を殺して厓に自ら欺く。是れ怯夫に非れば是れ僞人。

今の世の學者概ね是の類のみ何ぞ其の云爲の死灰枯木の如くなるを怪まむや。

單に一個の頭顱を有するの故に

道學先生怒て曰く吾等は神の前に平等也。汝獨り天才を揚ぐ是れ人の子を賊する者と。然れども神は既に死にぬ吾人は凡俗の前にも尙ほ平等ならざるべからざる乎。平等主義は頭數主義のみ。然れども吾人の釋迦、基督、日蓮、奈破翁が權

兵衛太郎兵衛乃至道學先生と同じく單に一個の頭顱を有するの故を以て共に同じく一個の投票權を有するが如きは吾人の勝え得る所に非ざる也。

醜なる哉東京市

山青く水清らなる是のみ國に吾等の首府の如何なれば斯くは汚れたる。

そこに立てる棟三十萬何處に聖者の息ふべき家ありや。形歪みて色けがれ飾り卑しくして式整はず吾れはむしる敗冢の群の尙ほ美しきを思ふ。其の路を見よ雨ふれば泥深く風吹けば塵揚り馬糞巷にうづたかし。墳の隠れたるを歩むにも似たらすや。路行く人を見よ其の面の物欲しげならざるありや。色あせて眉蹙み其の眼には偷盜の如き光あり。天の青きを仰がむと欲すれば空に電線のかゝれるあり月の夜の清きを眺めむと欲すれば地にうつる影尙ほ人間の燈に汚さる。鳥は來鳴かず花咲き匂はず耳をそばだつれば唯罪惡の響を聞くのみ。あゝ山青く水清らなるこのみ國に如何なれば吾等の首府は斯くは汚れたる。醜なる哉東京市。

(以上三十五年一月)



# 静思録

## 一 自分はイゴイストだ

静かに思ふと云つたところで別に何を思ふでも無い、皆んな自分の事を思ふに過ぎないのだ。自分はこの世の中で自分の外に何物をも思はない、否思はうとしても思ひ得ぬのである。自分は大方世人の所謂るイゴイストと稱する者であらう。

イゴイスト！人によりては此の名前ばかりで既に多くの罪惡を預想するであらう。剛情我慢私利私慾、不人情、沒道義——斯んな種類のあらゆる惡徳は此の名稱に關聯して直に想ひ起さるゝであらう。『彼はイゴイストだ』これだけの言葉は一個の人を道義の區域以外に放逐し得る力がある。あゝ何事があるにしても、自分は實際そのイゴイストに相違ないのだ。

自分だからとて何で、好き好むで斯様な者になりたくは無、萬々なりたくはない、が所詮致しかたが無いのだ。實際自分は自分の事の外は何物をも思ひ得

静かに思ふと云つたところで別に何を思ふでも無い、皆んな自分の事を思ふに過ぎないのだ。自分はこの世の中で自分の外に何物をも思はない、否思はうとしても思ひ得ぬのである。自分は大方世人の所謂るイゴイストと稱する者であらう。

イゴイスト！人によりては此の名前ばかりで既に多くの罪惡を預想するであらう。剛情我慢私利私慾、不人情、沒道義——斯んな種類のあらゆる惡徳は此の名稱に關聯して直に想ひ起さるゝであらう。『彼はイゴイストだ』これだけの言葉は一個の人を道義の區域以外に放逐し得る力がある。あゝ何事があるにしても、自分は實際そのイゴイストに相違ないのだ。

自分だからとて何で、好き好むで斯様な者になりたくは無、萬々なりたくはない、が所詮致しかたが無いのだ。實際自分は自分の事の外は何物をも思ひ得



ぬ境遇にあるのだ。若し自分の事をのみ思ふのがイゴイストならば自分は其のイゴイストと呼ばれて少しも異存は無い——人は己れ自らの外には何物でもあり得ないのだから。

實を言へば自分は自分一人の身をすら持てあまして居るのだのに何で外を願みる進があらうぞや。自分は久しい間難治の病氣に罹つてこの命一條を繋ぐにすら毎日一通りや二通りの苦勞では無い。それに家には妻もあり子もあり戴白の老父母もある。自分は誠にいさゝかな財産と収入とで彼等を養ひ慰め又育てねばならぬ。この仕事一つでも自分の境遇を解する人ならば如何なる健全なる人にでも決して容易しい事とは思はぬであらう。併しながら自分は斯様な事に思ひ悩むで自分の爲すべき事を忘るゝまでに弱い者でも無い。苟も此の心に確かに安立してあるならばナニ少しの病氣や貧乏に打勝つて随分爲たい事も爲し得ぬではない筈だと信するがさて此の心が如何にも思ふ儘にならない。外には生活の爲に戦ひ内には病苦のために悶きつゝある自分は更に病よりも貧よりも恐らくは天下の如何なる物よりも強い「己れの心」と云ふ大敵と闘はねばな



らないのだ。病ひは苦痛なき時には忘れる事も出来、貧乏は心がらで如何にも慰め得られる。されど誰れが自分自らの心より逃るゝ事が出来やうか。自分はこの大敵に遇つて凡ての精力を傾け盡したのだ。

自分は自分の心の苦みの何物なるかに就いては別に語るを要しない、それは大かた自分の分別の淺かりしたため、或は意志の弱かりし爲め、或は感情の變り易くして激しかりし爲め、——約りは自分の性格のあらゆる弱點に歸するであらう。自分は自分の境遇が寧ろ通常人の幸ひとすべきものであつたにも拘らず、自ら求めてかゝる不幸を醸した事に就いては、少からず自分自らの性格を憐みもし、且つ時には悔みもするが併し既に醸し得たる心の苦み其物の儼然たる事實なることに於ては遂に如何ともする事が出来ぬ。丁度ロバート・エルスマアがその懷疑の深淵に陥つて『あゝ神よ、妻よ、仕事よ』と叫んだ様に、自分は自分の存在の根底が或る悪魔の手斧によりて打たれたつゝある様に感じた。自分は暗黒の中に立つてこの悪魔と格闘を試みたが、自分の力が勝てば勝つ程自分の胸の苦しきはますます激しくなる。自分は自分の劍を以て斬る所の敵は自分の胸にあることを忘れたのだ。

自分は愕然として胸に手をあてた。そして自らの刃の痕より混々として流れ出づる血潮によりて自分の喉を潤した時、悪魔の聲は吾れ自らの聲の如く『吾は汝なり』と勝ち誇りげに自分の心の耳に囁いた。——あゝその後の自分は如何なつたか、又如何なりつゝあるのであらうか、自分は多く語るに忍びない。

斯様なことは自分の口より多く言ふべきで無からう。兎も角も與ふる者は富まねばならず、救ふるものは知らねばならぬ、自ら火ならぬものが如何にして他を火にすることが出来やうぞ。自ら己れの體を持餘して居る自分の様なものが、まあ如何して世の人々の爲す如くに人の爲めとか、或は世の爲めとか、或は國の爲めとかに盡すことが出来やうぞ。若し人は己れの爲に生きて居るものとすれば、自分はいゴイストたらざらむと欲するも得ないのである。

二 病氣の福音

自分が多病だから斯う言ふのではさら／＼無いが、病氣と云ふものは健康な人が想ふ様に忌み嫌ふべきものでは決して無い。眞に病中の趣を味はつた人から



見れば、健康な人の方が或は却て氣の毒の様にも見えるであらう。

病氣は吾々の軀を弱くするが、其の代りに吾々の精神の上にさまざまの貴むべき影響を與ふるものだ。濁れる心情を清め、淺ましい思想を深くし、動き騒げる胸を靜かにし、忙がはしき此の日常の凡俗生活の中にて吾々の想ひも寄らざる幾多の精神上の經驗を與へ、且つ吾々の心靈の上に最も嚴肅なる平和と光明ある希望とを與ふるものは實に此の病氣の力である。此の病中の趣味はとても健康な人の窺知を許さざる所謂現身證悟の三昧であるのだ。

故に病氣の日は徒らに藥を飲み眠を貪るべき時では決して無い、即ち是れ吾々の肉身の苦しみの犠牲の前に精靈の福音が祭壇の上に現はるゝ時である、ことを覺悟すべきである。佛家では昔より病時を以て發菩提心の好因縁となし、聞法省察の無上の機會として取扱つて居るが、決して佛家のみ然るべき筈では無い、あらゆる宗教家、思想家、詩人などには常に是の覺悟が無くては叶はぬ筈だ。

病氣は身軀の方から観れば『死』の攻撃である。あゝ『死』！此の世の中で此れ程忌み嫌はれて居るものは無いが、さりとて淺はかな人心ではあるまいか。あゝ是

の『死』を除いたならば何處に宗教があるであらうか、何處に哲學があるであらうか、また何處に詩歌藝術があるであらうか。人生のあらゆる幽妙高遠なるものは實に此の『死』に對するの安心、希望、解釋、裝飾の爲に作られたるものではあるまいか。若し吾人に是世に於て思ふがまゝにあらしむるならば、願はくは生きながら死にたいものだ、そしてこの現身によりて文藝、哲學、宗教の活ける解釋を得たいものだ。併しこんな望が無理であるとしても、吾々は決して失望するには及ばぬ、吾々は病氣と云ふものになり得るでは無いか。病氣とは他方より見れば半ば死ぬるの謂いだ。生きながら至るで死ぬる事が出来ぬとすれば、セメテ生きながら半ば死ぬることがまだしもの樂みではあるまいか。病氣の福音は即ち死の福音であるのだ！

それで自分は斯う思ふのである。——未だ曾て死の福音を耳にしたことの無い人が如何にして宗教家たり、哲學者たり、又詩人、美術家たる事が出来やうか。健康の身軀を有つて牛馬の如く飲み、食ひ、走り、動き、犬の吠える様に議論をし、羊の様に書物を食つて居る人が如何してこの人生のまことの味をかみしめる事が出



來やうか。「健全なる身軀には健全なる精神」といふ諺がある、これは凡俗社會の常識を標準とする人間に就いて言つた極めて凡俗なる訓言である、自分は却つて不健全なる身體にこそ健全な精神は宿り得ると言ひたい位だ。

斯んな事を書いたら讀者の中には自分の考へを病的として笑ふ人もあるであらう。あゝ病的！なんで病的が悪いであらうか。自分が果して自分の思ふ様な意味に於て病的であり得るならば此世に於ては是れ程仕合せなことは無いと平生思ひもし、又願ひもして居るのである。ナニモ御多分に外れまいとならば馬や牛の眞似をするまでだが、それでは此の世の中があまりあつて無いではあるまいか。——ああ自分の考は何處まで他様のと違つて居るのであらうか。會通の程も覺束ない、言ふだけ野暮であつたのかも知れないのである。

### 三 『ロバート・エルスマア』

望ましい事では無いが、先にも述べた通り、病氣も吾々にとりての籤入時で、常には得難い慰みを得ることが出来る。自分はこの頃病褥の上に暮した一月ばかり

の一部分を例によりて小説讀みに過ごした。勿論西洋の小説だ。中にはヨカイや、ゾラや、又は近頃獨逸の友人から送り越したワグネルの樂劇などもあつて、何れも多少の面白味はあつたが、其の中で最も自分を動かしたのはハムフレッド女史の『ロバート・エルスマア』であつた。

この小説は十數年前の出版で、歐米の社會には隠れもなき著名なる作であることは誰れも知つて居る事であるから、自分は今更らしく吹聴するにも及ばぬ筈だ。併しなから一度は讀みたいと思ひながら、ツイ今日まで機會がなかつた。自分の新しき感觸の一端をお話することも必ずしも無益ではあるまいと思ふ。勿論今の本邦の小説とは違ひ、七百頁にも近き一大冊子の梗概を述べることは出来ない。又ワッド女史の文學上の位置並に是の書の價值に關する批判も概ね歐米文壇に定論があるのである、今日、自分は是等に就いて兎角の意見は申すまい。唯自分は『ロバート・エルスマア』の中に描かれたる社會及び人物を觀て、つくづく今日の我邦に感ずる所があるから、それを簡単に述べたいのである。

十九世紀の後半紀に於ける宗教心の變動、それに伴へる虔信家の信仰上の苦悶



懷疑及び基督教の新解釋に本ける新信仰の樹立——是の徑行を説明するのが是の書の大目的で、主人公たるロバート・エルスマアは即ち是の時代精神の權化として現はされて居る。想ふにエルスマアの時代は歐羅巴、少くとも英吉利に於ては既に経過したであらう、併しながら其の餘波は尙ほ我邦の如き新開國の宗教社會には残つては居るまいか。自分の見る所ではエルスマアの時代は尙ほ吾邦に於て経過して居らぬ。併しながらロバート其人は果して何處にあるのであるか。基督教界に於て幾多先覺の名士が其の信仰の變遷に煩悶した事實は吾々の現に目撃した所である。併しながら彼等は如何にしてこの煩悶を解脱し、如何にして新信仰を求め得たのであるか。吾人は不幸にして其の形跡を審かにしない。唯最も明なのは信仰の變遷に悩みたる教界の所謂名士が何時しか或は聖書を捨て、算盤を取り、或は讚美歌を歌ひたる口にて米相場の符牒を呼び、或は天國の鑰を握りたるものが藩閥政府の官吏と化したる等の事實である。而して又同時に最も明なるは、是の煩悶を切り抜けて『基督の新同胞』を組織したるロバート・エルスマアの如き虔信、眞摯、剛邁、不屈なる人の殆ど一人も無かつた事實である！

暴風の後にまことの天氣が来る如く、煩悶の後にこそまことの平和が来る。大いなる誘惑と大いなる懷疑とに打勝つた信仰でなければ兎ても一代の人心を指導することが出来ない。彼等は彼等一人の身をすら保ち得なかつたではないか。

詩人キーツの言葉に『自分自らの脈搏の上に試みられたものに非ざれば公理も公理とは言へぬ』と云ふことがある。あゝ手に聖書を取り、口に讚美歌を歌ふものが信者であり得るならば、世の中はまことに幸ひであらう。併し眞理は口より口に傳へ得べきもので無い、金錢で購ひ得べきもので無い、吾々は皆自らの血を以てそれを證さねばならぬのだ。吾邦の宗教家などが果して吾々に何を爲し得る者ぞ。

ロバート・エルスマアの師たる牛津大學の教授ヘンリー・グレーに就いても自分は少からず感慨に打たれた。エルスマアは是の人の精神的感化によりて信仰の門に入り、而して又是の人の眞摯なる審斷によりて懷疑の苦みを脱した。昔にエルスマアに對してのみならず、グレーは當時英國社會の一大勢力として常に精神界の北斗と目ざされて居つた。自分は想ふ、是の如き人が若し今の我邦の大學に求むることが出来るならば、今の青年がどんなに力強く思ふであらう。知識の受け



責をする職人根性のプロフェッショナルや、高が活字引の腐儒等は吾等の精霊の上に何の力を有するものぞ。若し吾々がエルスマアの如き懷疑の淵に陥りて生死の苦悶と戦ふ時、仰いで救ひを求め得るグレイ其人の如き人は何處にあるであらうか。聞けば、グレイは小説中の假設的人物ではなく、かの有名なる『倫理學入門』の著者たるトーマス・グリンの事であるとの事。あゝ我邦の大學の倫理學の先生がこのグリンの様な人であつたならば……と自分はつくづく思ひに沈んだのである。

小説は決して戯れ事のみでは無い。この書の如きは儘に吾々の一部の精神上の生活を代表して、その中に少からぬ訓えと慰めを含んで居る。眞にロバート・エルスマアの物語を身讀し得た人があるならば、是の日本の社會の尙ほ光明を存して居ると云ふものだ。殊に自分は今の枯淡、無味、凡俗至極なる道學先生や村學究先生にツマラなき倫理書なぞよりも是の様な書物に就いて人生の活ける趣味を味はむことを勧むるものである。

(三十五年三月)

#### 四 自分自らの大善人

(未刊、草稿には  
静思錄二とあり)

世間の人々は口を開けば輒ち世の爲め、又は國の爲めと言ふ。併しながら世の爲め、國の爲めと云ふことが此の自分を離れて果して何等かの意味を有ち得るか否かといふことに就いては、自分は尙ほ疑ひの中に在る者だ。自分自らの存在を無にして何處に人生の意義を求むることが出来やうか。宗教は無我を以て人道の大歸として居る。もし是の所謂無我が我の存在の最高状態を示すものでないとするれば、自分は毫も宗教の貴むべき理由を解し得ざる者だ。自分は素より社會や國家の存在を是認する、併しながら吾人は彼等の君主であることを忘れてはならぬ。臣下とは必ずしも責を納むるもの、謂ひではない。カイゼルの物はカイゼルに還すが宜しい。併しながら精神的に彼等の存在の根底を約して居るものは吾人自らであることを忘れてはならないのだ。

斯んな考へを有つて居る自分は恐らくは世間の道德から見れば悪人と謂はるべき者であらう。併しながら是の如きことは少しも悲むに及ばない、外から見るとどんな悪人であらうとも自分は自分自らの大善人であるのだ。吾々は他が幸いと云ふたとて自ら砂糖の甘きを欺くべきでは無いではないか。



併しながら自分だからとて木の股から生れたものでもなく、又沙漠の中で育つた者でもない、今茲まで三十二年の春秋は矢張り此の世の中で人並みに暮し來つたのだ。學校に入つて人並の教育も受け、人並みに書物も読み、色々の人にも接し、種々の事にも關はつて、つらい目にも嬉しい目にも先づ人並みには出遇つた積りだ。一口に言へば自分は世間の最も多くの人と同じく時代の蠢々たる産物の一つに過ぎないのだ。されば自分の精神が此時代の感化を離れて獨立して居るとは素より思はないし、又獨立し得るとは猶更ら自分は考へない。自分は何處までも此の世の中の影響を受けて居るに違いない、違いないが自分は此の影響に對して恨みもせぬ代りに別に喜びもしないものだ。それは自分の存在に關する價値の標準は『我』の満足の外には何物にも求むべきでないことを自分は確信して居るからである。されば自分の様なイゴイストの云爲にも、時としては社會とが國家とかの爲に何等かの意味のあることも無いでも無からう。併しながら是を以て自分を批判する人があるならばそれは間違ひと云はねばならぬ。自分の思ふ所は別にある。是の如きはつまり自分にとつて偶然の結果であつて、自分の初

無

題

録

無題録

(三十五年三月)

めより眼中に措かなかつた事が何かの機みに或はおのづから外に現はれたに過ぎないのだ。イゴイストたる自分を外にしては、別に自分といふものが、是の世の中には無かるべき筈と自分は固く信じて居るのである。

自分は社會や國家の中には存在して居らぬ、社會や國家が却て自分の中に存在して居る。——自分は此の單純な信條の下に精神上の生活を營みつゝあるものだ。あゝ是の如くにして生活することが果して罪惡であるのであらうか。

◎國民の注意すべき二個の紀念祭は今月に於て施行せらるべし。菅公の千年祭は其の一也。日蓮の立宗六百五十年紀念會は他の一也。

◎前者と吾人と何の關はる所無し。何となれば多恨なる詩人、小心なる政治家、順良なる王臣と云ふの外、吾人は菅公に於て何物をも認むる能はざれば也。唯後者に關しては一言の讀者に告ぐべきものあり。



◎吾人の見る所を以てすれば、日蓮は日本が嘗て産出したる人物中の最大なる者也。彼れを以て日本のルートルと呼ぶは誤れり。彼れの偉大は獨り基督のそれと較べ得べけむのみ、同國人として彼れを追懐し、景仰し得るは吾人にとりて大いなる力也。

◎彼れの人物を歎美することに於て、佛教徒は宜しく、其の宗門の争を抛つべし。基督教徒も國學者も亦其の小偏見を排斥して、齊しく彼れにアヤかる所無かるべからず。

◎吾人は是の一大偉人の紀念祭が區々たる日蓮宗徒の一部によりて經營せられつゝある間に、國民を擧げて牛馬相關せざるの觀あるを見て、轉た惋惜の念に勝えざる也。

◎遮莫今の日蓮宗徒は何の面目ありて其の宗祖の紀念を新たにせむとするや。今日宗風の衰頹、僧侶の墮落、其の由て來るところ果して那邊に存すと爲す。日蓮の遺風は既に墜ちぬ。彼等は何を以て所謂の紀念會の實を擧げむとする。道路傳道や演說集會を以て彼等の能事了れりとするあらば、是れ獨り日蓮の罪人のみに非ざる也。

に非ざる也。

◎吾人は茲に田中智學氏の近著本化攝折論を江湖に紹介せむと欲す。是れ佛教根本の一問題たる攝受折伏に關する著者の意見を披瀝せるもの。高遠なる議論を行るに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快也。蓋し一部の日蓮主義として見るべき乎。是れ一宗一門の徒の私すべきものに非ず。吾人は今の學者青年が是の種の書によりて其の知見を開拓せむことを切望する者也。

◎當今若し倫理上の緊急問題ありとすれば、それは德育問題にも非ず、公德問題にも非ずして、道學先生自らに對するの倫理問題ならざるべからず。

◎何をか道學先生に對する倫理問題と云ふ。彼等自らをして道德を口にすること資格なきことを自覺せしむる也。否、倫理學說其物の本來無價値無能力なることを證悟せしむる也。

◎倫理學說は猶ほ蛆の如し。それが徳教の腐敗を救濟するの力無きこと猶ほ蛆が糞土の汚穢を清淨にするの力無きが如し。而かも腐敗に伴へる必然の產物なることは彼此相同じ。



◎借問す、東西三千年の歴史中に於て、道學先生の所謂る道德論が世を救ひ人を化したるの例しありや。

◎凡そ古より積極的に人生の幸福を増進し、希望を豊富にし、吾人に理想と平和を與へ、吾人を感激し、鼓舞し、以て生々發展の大道を助成したるものは宗教也、文學也、美術也。然らざれば唯心論の哲學也。我が道德先生の所謂る道德と學究先生の所謂る真理とは共に與らず。

◎學說理論は常に文明の崩壞に伴ふ。然れども理想は永遠に失はれたる也。是に於て彼等の所謂る文明は實は文明の崩壞の謂のみ。

◎凡百の學知、岐路百端、造詣愈々深くして、人生の歸趣を去ることいよく遠し。大宗教、大文藝に對する向上の渴仰、是に於てか猛然として起る。是れ即ち失はれたる文明に對する十字軍也。

◎丁酉倫理會にてニイチエを批評す。惡謔するもの曰く、是れ日蓮上人を鎌倉の殿中に糺問するの類のみ。差向き平左衛門の役目は中島德藏氏か、桑木嚴翼氏かと。蓋し齊東野人の語ならむのみ。

◎然れどもニイチエを解する者は所謂る倫理學を知らざるも可也、認識論に通ずるを必とせず。彼れは唯少くとも文藝宗教の趣味を解し、現代人生の甚深なる苦悶を身讀したるものならざるべからず。此の如きは獨りニイチエを解するのみならず、亦人々相解するの道也。

◎ニイチエは人也、然れども人は必ずしも學者、文人、宗教家等と分たるゝを要するものに非ず。ニイチエにして是等の何者に非ずとするも何の累する所ぞ。各自は知解に本づく、然れども世には知解以上の證悟によりて初めて了し得べき幾多の事物あることを知らざるべからず。

◎今の文章の多くは偽文のみ。意誠語朴の眞に人を動かすもの極めて稀也。

詩人キーツ言あり曰く、己れの脈搏の上に試みられたるに非ざれば公理も公理と稱するを得ずと。嗚呼戀愛と云ひ、希望と云ひ、慰藉と云ふ、何れも人生の最大事實也。自らの血と涙とを以て是を解釋したる人にして初めて是を口にすることを得む。◎文字は符號のみ、それを註解するものは作者自らの生活ならざるべからず。文は是に至りて畢竟人也、命也、人生也。



◎人の産み得るものは唯己れの子のみ。あゝ今の時墨工塹人の類にして詩人と稱し、文學者と號する者何ぞ一に多きや。

(三十五年四月)

## 宗 教 談

◎日蓮上人と云へば人は皆エラキ坊主なるを知れども、扱て如何にエラキかを知れるは極めて稀にして、大方は日本のルートル位の漠然たる概念の外は有たざるが常也。何故に斯くは名のみ傳はりて實の知られざるやと尋ぬるに、其の主なる原因二つあるが如し。一つは日蓮の宗旨は本來他宗と兩立せざる性質のものなるが故に、佛教徒の中にも同宗門徒の外は蛇蝎の如く憎み嫌ひて初めより耳目を假さず、況して深く其人物性行に立ち入りて研究するが如きは押しなべて想ひも寄らざる事也。故に試に今日淨土眞宗等の名高き學者に向つて、御身は日蓮の御書を読みたりやと問はゞ、十中の八九は讀まずと答ふべし。かゝる有様なれば他宗の僧俗は殆ど絶えて日蓮の爲人を知らず。同宗の門徒間には其の祖師のこ

とて流石に深く研究せる人はあれども、概ね同一門流の間に會通せらるゝのみにて、門外の人には多く傳はらず、斯くて世間には其の人物の真相の弘く知らるる機會なくして過ぎ來れる也。

◎日蓮上人の世に知られざる他の原因は、其の研究の困難なるが爲也。こは日蓮上人に關してのみならず、すべての佛教者の研究に共通せる困難也。それを如何にと云ふに、抑々佛教は基督教など、違ひ、主として道理の上に建立せられたる宗教なるが故に、其の教理の判釋は極めて複雑にして且難澁なるもの也。随つて古來諸高僧の有せる信仰も單純なる感情に非ずして何れも是の複雑難澁なる教理の中に根底を有せざるは無く、随つて又是の信仰に本づける其人物性行を會得し批判するに當りても、すべて其の根本たる教理の判釋を離れ難き場合多し。是の故に日蓮上人の研究に於ても、單に世間に現はれたる事業の側より其の人物を觀破することは思ひも寄らず、少くとも法華經の教理上より其の人格の根本を明かにせむことを要す。この教理上の研究を離れては上人の遺文は一句一字も其の眞味を解し得べからず。其の世間に現はれたる一言一行も亦其の根本の動機を



知るに由無し。是の事は佛教者と雖も尙ほ易しとせざる所、況してや門外の世人より見れば極めて難事と謂はざるべからず。是れ日蓮上人の真相が廣く世に知られざるの第二の、又主なる原因なるべし。

◎佛教と基督教とは是の點に於て最も相違を有するを見るべし。基督教の教祖たる耶穌の信仰は最も單純なる感情に本けるものにして、人生自然の要求を直下に感應せしむるを主とせり。随つて其の宗教には本來教理なるもの無く、唯純潔なる人性本然の感情あるのみ。されば耶穌自らの説く所は苟も人性あらむもの、凡てが各々其の胸底に於て直下に會得し得べき最簡最明の事實にして、それを會得せむが爲には哲學を要せず、傳説を要せず、唯人の心あれば足る。故に彼れの教に最も耳を傾けたるものは、多くは漁夫村民等無智無學なる小兒の如き心を有するものにして、彼等に説ける耶穌其人も亦當時の學者、僧侶などの眼より見れば實に無學無智なる大工の息子に過ぎざりし也。彼れが歴か三年の短日月の間に後世歐洲を一統すべき大宗教の根本を建立し得たるは畢竟其の信仰の單純にして解し易きが爲め、一言すれば感情的なりしが爲めに外ならず。今是を釋迦が一

代五十年の永き間の説法によりて其の教を立てたるに比すれば、彼此兩教が其の信仰の性質に於て根本的に相違せる所あるを知るべし。(中略、上九五〇頁参照)

◎此頃日蓮宗の青年信徒の中に、祖師が立宗の紀念會を機會として道路演説を爲せるもの尠からざるが、是の道路演説は我邦の宗教史上にては是の宗旨の特有にして、他宗には殆ど絶えて其の例を見ざるが如し。先づ其の第一の模範を開きたるものは宗祖日蓮其人なりとす。

◎日蓮が當時天下の霸府たる鎌倉の、今の東京にて云へば日本橋通とも云ふべき小町の辻に於て、路傍の石に腰掛けながら、天下を敵として折伏の大法螺を鳴らせしは世人の熟く知るところ、現に今は本化妙宗の優婆塞田中智學氏の周旋によりて其の遺跡に立派なる紀念碑をさへ立てられたれば、茲に申し述ぶるまでも無し。

◎日蓮の以後に於て道路演説にて有名なるは久遠成院と謚せられ、京都本法寺の開祖として是の宗の道俗には其名かくれもなき日親上人也。この上人の事蹟は、時の政府より大迫害を受けたる點に於て本邦宗教史上に一異彩を放てり。又



他方より見れば、凡そ一個人の信念の力が如何なる點まで外來の勢力に反抗し、折伏し、且つ是に打勝ち得るものなるか、又一念の信力が靈性に安慰を與へたるの結果として、如何に肉體の苦惱を忍受し、且つこの苦惱によりて受けたる傷害を無効ならしめ得るものなるかの絶好の事例として見るを得む。(以下日親の事蹟全集第三卷四六九—四八六頁参照)

◎あゝ日親の如きは眇たる一沙門に過ぎざれども、其の信念の力によりて國家を折伏し、個人の勢力が時としては地上の如何なる權力にも匹敵して其の威嚴と榮光とを保ち得るものなることを現示せる人道上の一大事實として見るを得べし。殊に人間の力として殆ど堪え忍び得べくも覺えざる酷烈なる傷害も、一念の信力によりて優に是を忍受し、是れに打勝ち、獨り精神の獨立のみならず、肉體の健全をも保全し得たるは、實に目ざましき事例と謂はざるを得ず。世人往々曰く『人は氣で生きる』と。日親の如きは眞に是の套語を事實の上に現はしたるものと謂ふべし。

◎因に曰ふ、日親は八十二歳の天壽を以て、其の開きたる京都の本法寺に逝きぬ。

今や日蓮宗の道俗や、活氣を呈し來り、日蓮、日親の遺業にならひて辻説法を試むるもの少からず。知らず彼等の中、燒箔を冠りて晏如たるの覺悟を有せるものありや。將軍吾れに歸依せずむば斷じて獄を出でじと傲語し得るものありや。

(廿五年四月—五月)

### 坪内氏の自意識論

自意識の過度を以て時代精神の痼疾となすは坪内博士が年來の宿論、近時當來の娛樂を論ずるの主旨亦此に本づく。吾人の首肯し難き所也。

如何なる場合に於ても、自己が存在の意識を離れて、人生の幸福を求め得べしとは、吾人の思料し能はざるところ、所謂忘我と云ふもの亦是の意識との對比を離れては、其淨樂を現じ得べしとは想はれず。若し夫れ深刻なる自意識が時にいはゆる個人主義に幸ひするの故を以て、社會道德の見地より是を排斥するが如きは、素より取るに足らざるの俗論のみ。然れども、坪内氏と吾人と互に其の立脚の地盤を異にせり。理を争ふも固より益する所無けむ。



古き眞理

年若き人よ、如何なれば是の麗はしき春の日を尙ほも名利の巷に走り暮さむとはするぞ。さらばこの涙の谷に住みながら尙ほ愁ひの泉底淺しと歎たむとや。まことに是れ古き眞理也。されど春風年ごとに面を吹く毎に、人は乃ち老ゆるを如何せむ。聲あるものよ、何ぞ歌はざる。歌ひ得べき日は此世に幾何もなきぞかし。口あるものよ、何ぞ飲まざるや。酒杯に對して漫に其の泡を吹く勿れ其の泡の消えざる前に汝の命の終りを告げざることを誰れか保し得るや。

年若き人よ、胸に青春の炎を宿するもの、口に道義を説いて何にかせむ。炎は他を焚かずむば自らを焚かむのみ。其の髪尙ほ緑にして其の心死灰の如くならむ醜くからずや。

法則と生命

新しき聲の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂る法則なるものを

造り出だす。是を以ての故也。所謂る法則の榮ゆる處、そこには必ず生命の死滅あるは！

吾人の理想

吾人に三つの理想あり。一に曰く完全なる生慾。二に曰く安眠。三に曰く平和。

唯是れのみ、あゝ唯是のみ。

永き戀、早き死

此の生の憂苦を免るゝの道、たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然らざれば狂。あゝ吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎。

イゴイスト

人あり吾人に言つて曰く、予はイゴイスト也。是の活き甲斐もなき生を享けな



がら、何の違ありてか人の爲にし世の爲にせむ。是の如きは世の謂はゆる悪人ならむ。然れども予は予自らの善人なれば則ち足ると。  
吾人聞いて答ふるところを知らず。唯憮然として僅に點頭けるのみ。

裸體の盛裝

今の所謂の道德が方便形式慣習を離れて如何ばかり個人が中心の要求に應ずるものなるかを檢覈するは吾人の見て現下の急務とする所也。  
人々各々自己の意識に點火して靈性の聲に聴くところあれ。昔者裸體にして盛裝せりと想へる一人の王ありき。王の恐は可し、裸體を觀て尙ほ齊しく其の盛裝を讚美せる群臣百性に到りては忍ぶべからざる也。あゝ人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

己れの立てるところ

哲人教へて曰く己れの立てるところを深く掘れ、其處には必ず泉あらむ。自ら

の心の中に求むるところあれよ世は即ち汝の物ならむ。  
然れども悲しき哉、多くの人は己れの立てる處を知らず、何處に自らの心をもべきやも覺らざる也。  
(卅五年五月)

無題錄

◎英の僧正バーカー大に皇帝を罵つて曰く、帝は日曜日教會に行かずして劇場に行く。是れ基督の罪人に非ずして何ぞ。予は皇帝の忠臣たらむと欲するも、而かも基督に不忠なる能はずと。

◎僧正の言や太だ佳し。而かも是の激語に喝采せる英國國民は福ひなる哉。アングロサクソン民族の前途尙ほ多望なりと謂ふべし。

◎是を我邦宗教家の競々として時勢の迎合に務むるに比す、そも何等の相違ぞや。彼等は神の物をも尙ほカイザルに還さずむば已まず。超世の理想永く消え失せて靈は翼なきものとなりぬ。あゝ是の如きをしも尙ほ宗教と謂ふべき



乎。

◎是の如き國民も尙ほ其の祖先の中に日蓮上人の如き人を有したりき。宗教家よ、六百年の往時を顧みよ、少しく自ら耻づる所あらずや。

◎日蓮佐渡より赦され歸るや、鎌倉の殿中に激語して曰く、日蓮生を王土に受けたれば、身は隨ひ奉るとも、心は隨ひ奉るべからずと。是れまさしく四福音書中最大の宣言たる神の物は神に歸せの意に非ずや。身は是れ佛子法臣たり何ぞ一俗吏の爲に大覺世尊の告教に違ふべき。神の國は遂に人の國に非ざる也。

◎されば日蓮にとりて實在せるものは宗教のみ。唯この宗教を護持する處に國家の職能あり、榮光あり。一切世間の權勢威力の如き、正法護持の因縁を離れては一も存在の意義ある無し。是れ獨り日蓮のみならず、釋迦基督の眞意にして、乃至一切の宗教の依て樹立する所の第一義也。

◎是の故に謗法の國土は一日も存在せしむべからず。佛天の威力は是の膺懲の爲に世界を監視しつゝあり。恰もクロムエルがダンバーの戦を目して『神事』と稱せし如く、日蓮は蒙古の來侵を以て謗法の國土に對する當然の佛罰なりと思惟

したりき。

◎あゝ、マルストンの戰場に臨み、ダビデの詩篇を誦したる人の信仰を解し得る人に非ずむば、恐らくは吾人の言に首肯し能はざらむ。殆い哉、吾が言や。

◎井上圓了氏の甫水論集は必ず世上に歡迎せらるべし、所謂る護國愛理の二主義を標榜し、野にありて哲學的知識の普及に力めたる氏が、三十年来の經歷は、今の操持なき學者間には、兎も角も珍しき事例たるを失はず。其の言概ね平明にして解し易く、事を淺近に假りて理を高遠に托す、用意見るべきものあり。其の說に服せざるものをして尙ほ快く其の言に聽かしむる圓通滑脱の技倆は、氏に於て特に推重すべしとす。氏も亦所謂る老大家の風ありと謂ふべし。

◎然れども吾人は所謂る老大家に於て幾多の嫌らざる所あり。其の說の中正を求めて、斷案の多く曖昧なる、世故閱歷に長ずるの弊として、青春の理想を失へる、敵を作らむとすることを恐れて、故らに圓滑の辭令を用ふる、文情共に平穩に過ぎて、讀者を動搖するの力無き、概ね皆然らざるは無し。



◎若し所謂る中正を以て旨となさむか事是れより容易きは無けむ。唯平淡和樂の辭は時弊に對するの立言として人を動かすの力無きを如何。人往々矯激を以て吾人を責む吾人不肖と雖も豈駁者の言を待つて所謂る平穩の理を解せむや。

◎餘事は暫く措かむ。甫水論集中吾人は『余が所謂宗教』の一篇を推さむ。是れ曾つて哲學雜誌に掲げられたるもの近時の宗教論中色讀體達の旨義に於て尤も吾人の意を得たるに近し。

◎氏は佛教を理に於て台家の所謂る事觀の妙法によるものゝ如し。佛教の厭世教に非ざるを主張し眞如開發の現實世界に即して直に安立の地盤を求むべきを説くところ淨土念佛の厭離思想を取らずして寧ろ日宗哲學の一念三千の眞意に近しと謂ふべし。將來の佛教に就いて日蓮宗諸師に望むの一篇亦氏の思想の傾くところを見るべき也。

◎予は佛教を理に於て全く門外漢たり。然れども台家一流の此土寂光の妙理を擴充して一大現世教を建立したるの一事は實に日蓮上人の大卓見なることを認めざるべからず。井上氏の眼を是點に着けたるは吾人の同意を表する所也。

◎『天下萬民諸乘一佛乘と成りて妙法獨り繁昌せむ時萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉りて吹く風枝を鳴らさず雨壤を碎かず代は義農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得人法共に不老不死の理り顯はれむ時を御覽せよ。現世安穩の證文疑ひあるべからざるもの也』。是れ即ち『此土即寂光』の事觀の教相を現實的に表彰したるの言なりき。

◎人あり前號掲げたる吾人の日蓮論を見其讚美の太だ過ぎて日蓮宗徒の言と擇ぶところ無きを笑ふ。知らず吾人を笑ふ者と日蓮を知るに於て果して孰れぞ。

◎前號掲ぐる所は謂はゞ序論のみ。日蓮と日本國預言者としての日蓮宗教史上に於ける日蓮の地位日蓮と其の宗門日蓮と基督——是等は吾人が次を追うて世に問はむと欲するところ。而かも病の爲に長文を草すること能はざるの故に暫く腹筒に藏むるのみ。吾人の日蓮論は尙ほ未だ大方の批判を受け得べき迄に分明ならざる也。所謂る讚美の太だ過ぎたりと云ふもの果して何の謂ひぞ。

◎遮莫日蓮上人の世に知られざるは疑ひも無き事實也。曰く四個格言曰く辻



説法曰く龍口法難曰く佐渡遠流。人は唯是の種の三四の事相に據りて、剛情我慢の一英雄僧を想ふに過ぎず。其預言に關しては比するにサボナロラを以てし、其折伏の態度を以ては日本のルテルに擬するの類、多少の識見を有する者の批評亦是の如きに過ぎざるのみ。誣妄も亦甚矣。

◎是の凡俗至極なる惡世に於て、日蓮の如き人物を祖先として追懐し得るは、吾人にとりてそもく何の幸ひぞや。政治家が良心を閉ぎ、道學先生が道德を受け賣する時に、妙經身讀の行者が此土即寂光の大理想の爲に天下を敵として戰へる風姿を想望するを得るは、吾人にとりて何等の祝福ぞや。

◎是の祝福の吾人に降りたるは實に近時の事に屬す。試に後に來る者の爲に吾人の經歷を語らむか。

◎六七年前のことなりき、予は或處に於て偶々日蓮の文章と稱する者を見たる事あり。當時の予は日蓮に就いて何等特殊の感興を有せざりしが、其の文章の一節がいたく予の好奇心を動かしたるは忘れもせざる事實なりき。然れども予は未だ佛教の教理に通せず、日蓮の教判等に就いて何等會得する所無かりしは言ふ

までもなし。所謂る予の好奇心を動かしたる一節は、單に其文字の雄壯にして語調の豪快なる、太だ平生見る所の國學者の文章に異なるものありしが爲のみ。後來數々是の事を追懐せしことあれども、間もなく是の一節の文字すらも遺却し去りたりき。然れども何時かは日蓮上人の文章を研究するの機會に遭遇せむことは是より永く予の希望の一つとなりたりき。

◎今日より想へば、往年予が偶目したる文章は、教行證抄にして、所謂る好奇心を動かしたる一節は、『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れくの經々と法華經と、勝劣淺深成佛不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず。いかに況むや、夫れ以下の等覺の菩薩をや、況して權宗の者共をや』と云へる有名なる一段なりし也。

◎されど予は專修の學科に忙はしく、この志願も心に任せず。凡そ六七年間の間は忘れたるが如くにして過ぎ去りき。然るに去年病を養はむが爲に大磯に在りし時、日蓮研究の素願を果すべき機縁はゆくりなく現はれぬ。

◎去年の秋の初なりき、予は田中智學氏より『宗門の維新』と題する一冊の寄贈を



受けぬ。是の書は予が其後本誌上に紹介せしが如く、祖師上人の垂示せる大理想に本づきて今の日蓮宗を改革し、以て世界を統一する一大宗教となさむとする著者の抱負と計畫とを述べたるもの也。予は是の書を読み、著者が熱烈なる精神の上、に及ぼせる日蓮上人の勢力を想ひて、深く心に感ずるところあり、更に上人の文章を研究せむと欲せし、往年の志願を憶ひ起し、この一念の發起に乗じて、是の偉人の組織的研究を思ひ立ちぬ。

◎予は是の目的の爲に十月の末より鎌倉に移り越しぬ。以爲へらく鎌倉は日蓮の生涯に於て最も重大なる紀念を留めたるの地、其の遺跡に對すれば、追懐の想念おのづから新たなるべく、孚應の感化亦其の間に現はれむ。且つ是の地は予に『宗門の維新』を寄せたる田中氏の住する處、未だ一面の識無しと雖も、若し告ぐるに情を以てせば、必ず予が研究に對して有益なる指導を與へらるゝならむと。

◎斯くて鎌倉に移りたる後、予は田中氏を訪うて面會を求め、告ぐるに來意を以てせり。氏は予の志を諒とし、研究の方法に就いて審に示す所あり、且つ必要なる書籍を貸與せられたり、是の如くにして予が日蓮研究の端緒は開かれぬ。爾來予

は方めて、『御書』の精讀と教理の研鑽とに従事し、時に田中氏と會して判釋を聞くことを樂めり。予の領解は果して多少の進境を示したりや、日蓮上人と予と果して相近きつゝありや。予自らは是を知らず。唯是の研究が予に從來未だ曾て知覺せざりし一種の満足を與へたる事は予にとりて至大の報酬と謂はざるべからず。而して是の間に於て田中氏が予に與へられたる多大の厚意は予の實に感謝に堪えざる所也。

◎研究の進歩するに隨ひて予は先づ日蓮上人に對して從來予が有せる概念の甚だ謬れることを覺りたり。想ふに世人の有する所の概念も亦是の如きに過ぎざるべし。然らば則ち日蓮の人物は殆ど全く世に知られずと謂ふも過言に非ざらむ。予は是を以て甚だ遺憾なる事なりと思惟したりき。

◎日蓮をして通常の人ならしめば、其の知らるゝと知られざると世に於て關はる所無けむ。然れども予は彼れの人物に於て眞に世人の無知を遺憾とするの偉大を認めたり。想ふに彼れを世に知らしむるには多くの困難あらむ、而かも予は如何なる困難も彼れの眞相を世に知らしむるの功德に比較すべからざること



認めたり。殊に今の俗悪なる國民に向つて其の祖先の中に是の如き大人物ありしことを訓ふるは道學先生が千萬回の講話にも優りて偉大なる精神的感化を與ふべきを認めたり。是を以て予は自ら計らず予が認めて日蓮の真相とする所のものを書して世に問はむとの決心を固めたり。

◎予が日蓮研究の因縁は略々右に説けるが如し、如今不幸にして病の爲に長論文を草する能はざるを以て暫く續稿の掲載を見合はせたりと雖も、佛天の加護によりて予が素志の貫徹せらるべき日の早晚來るべきことは予の疑はざる所也。

(三十五年五月)

◎道德を説くに日常市井に見る所の平凡の事實を以てせよ。何人にも學むで得らるべく力めて達し得べき類例を以てせよ。非常異例の事を語る勿れ。英雄豪傑の傳奇の如き兒童の心を動搖するものは力めて是を避けよ。是れ今の道學先生の吾人に訓ふる所也。甚い哉今の倫理教育の俗悪凡庸を極めたるや。

◎平凡の人を作るに何ぞ故らに教育の煩はしきを待たむ。非常の時に處する

の道是を教ふる平日に於てに非ずむば果して何れの時に於てぞ。且夫れ道德は摸倣に非ずして感應也。英雄豪傑の事蹟を体するの時、現はるところは大なる理想の光被也、新たなる生命の化育也。夫の道學先生の如きもの畢竟是の三昧を解せざるの弊に坐するのみ。

◎凡人を作るのみが教育の目的には非ざるぞかし。天才無き人類を想像せよ、是れあらゆる想像中の最醜最悪なるものに非ずや、釋迦、基督、プラトー無く、ミケランヂェロ、沙翁、ゲーテなく、クロムエル、奈破翁なく、孔子、日蓮なき世界の歴史を想像せよ。嗚呼誰れか是の如き想像に勝え得るものぞや。

◎世に若し天才を作るの道あらば、そは天才を崇拜することに外ならず。凡俗に甘する人をして欲するがまゝに凡俗ならしめよ。天若し一個の天才を降さむが爲に吾人に要むる處あらば、吾人は如何なる犠牲をも貴しとせざらむ也。

◎蠢々乎として生死するもの世に幾億兆ありとするも、永遠なる人道に於て何の徳とするところぞ。百萬の生靈は斃れたり、然れども一奈破翁の名を歴史に留めんが爲めの代償として何の悔ゆる所ぞや。



◎道學先生よ何ぞ盛に英雄豪傑の非常の事蹟を以て汝の子弟に教へざる。彼等をして英雄豪傑たらしむべくむば素より大いに可也。依て以て夫の凡俗の小人をして自ら耻ぢしむる所ある尙ほ可ならずや。

◎人は輒ち眞理と言ふ。請ひ問はむ、そは汝の眞理か、將た吾の眞理か。若し汝と吾と互に見る所を同じうせば、是れ多數決の眞理のみ。汝と吾と共に與らず。嗚呼世の所謂眞理は道德と等しく畢竟多數決に非ざる乎。ジビテルの彼方に於ても一と二との必ず三を成すことを誰れか保し得るや。

◎自ら道德を造る者のみ能く善惡を口にし得べし。エミール・テネリが判官に答へたる言葉に聽け。吾人をさばく者は吾人自らならざるべからず。暫く他を許して其の所謂善惡を言はしめむ。而かも爾等の中罪なきもの唯かく言ひ得べきのみ。

◎曾て吾れ多くの人の意味を知りしが、而も吾れ自らの誰れなるかを知らざりき。吾が眼は吾れ自らを觀むには餘りに吾れに近かりき。貴いかな是の覺醒や。

◎社會は多く其の寵兒を殺す、是を以て眞人は多く死して而して初めて活く。人よ、汝を殺すものは必ずして刀杖に非ざる也、鳩毒に非ざる也。俗人に擁護せられ惡世に讚美せらる、是れ永遠の死滅也。『肉に死するものは肉に活くるを得む』たい、靈の滅ぶるもの、吾れ是れを如何ともする無き也。

◎吾が説や多くの人に容れられじ、然れども何人にも破られじ。吾が言に聽いて喜ぶ人は少からむ、然れども世界の人のすべての歡びも吾れ自らの満足に比すべからざる也。此處に吾あり、彼處に日月あり、かの紛々擾々たるもの、夫れ是の事實を如何せむとするや。

◎人に訓ふるは吾れの能くする所に非ず、人に與ふるも亦吾れの能くする所に非ず。吾は唯水の如く流れ、鳥の如く歌はむのみ。宿因若し空しからずんば、願くは吾と同じきものと共に、是の天賦の榮光を讚美せむかな。◎我は我自らの爲に活く。若し社會國家にして與かるあらむと欲せば、彼等は



先づ我が有たらざるべからず。  
三千法界を以て是の一念に攝折す。忠孝節義初めて共る語るべき也。

(廿五年六月)

### グリーンと道學先生

西普一郎氏グリーンの倫理學入門を翻して近時の好譯述と稱せらる。あゝ、グリーンを譯する者は是れあり、グリーンの如き人は何處にある。

道學先生と雖も、ハンフレッド女史に『ロバート・エルスマア』の著ありしことは聞き及べるなるべし。是の小説の主人公たるロバートの師、ヘンリッ・グレンは實にグリーン其人を描寫せるものなりと云ふに非ずや。オクスフォード大學に於ける彼れの感化は其講筵に於けるよりは寧ろ其人物にありき。新舊信仰の變遷時代に際して思想界の木鐸となり、能く一世懷疑の風潮に卓立して殊に青年學生の指導者となれる彼れの如きは眞に古の哲人に近しと謂ふべし。彼れの感化によりて其舊

信仰を失ひたるロバートは、復び彼の影護によりて其の新信仰を求むるを得たり。彼れは今の道學先生の如く朝夕道義を講ずるを職業とするものに非ず。彼れ自らの身讀し體達したるものおのづから外に現はれて所謂道義の説を成せるのみ。其の説の由て來る所蓋し深重なりと謂ふべし。今の道學先生の知る所は『プロレゴメナ』にありてグリーンにあらず。漫に口耳の擬似を事として其人物の本來を見ず。口を開いて輒ち道と云ひ徳と云ふ。道德の事何ぞ夫れ容易なるや。

(上) 四頁参照 (三十五年七月)

### 故大橋佐平氏

(大橋圖書館の開館に際して感あり)

吾人は故大橋佐平氏を大なりとする者也。其の富貴を論じ其權勢を説かば、世間其人に乏しからざるべし。唯其の人物の一徹にして其の事業に終始ある點に於て吾人は氏に於て一個の眞人を見る。

三圓八十錢の家賃を以て其の商店を本郷弓町に開きしより、彼れは一度びも其



信する所を枉げざりき。内にありて一心の是認に背かず外に向つて文明の大勢に循ふもの、事業は必ず最終の勝利を收むべしとは彼の常に確信したる所なりき。彼れは是の確信に本づき疑懼なく躊躇なく斷々乎として其の欲する所を行ひたり。爾來十數年にして彼れの贏ち得たる金錢の成功は素より岩崎三井の倫に非ずと雖も尙ほ一個人が其赤手と信念と意志と勤勉とによりて得たる清淨なる資産としては眞に敬服すべきものなりき。

然れども是を社會に得たる利益は亦是を社會に報ひざるべからずとは彼れの平生の所志なりき。是に於て彼をして書肆の主人たらしめたる同一の志願は茲に彼れをして圖書館を設立して社會に寄與せしめたりき。蓋し十二萬五千圓は岩崎三井の資産より見れば殆ど零碎の高なるべしと雖も彼れは永く日本に於ける最も大いなる寄附者の一人たるを失はざるべし。彼れの事業は是に於てか始あり又終りありと謂つべし。

是の如くにして彼れは其の信する所を行ひ爲さむと欲する所を爲して靜に此世を去りぬ。終りに臨みて彼れの遺したる文書中に左の文字あり。

人は天然界また人間界に於て自心を確立し是自心の爲に始終活動すべきもの也。

人は自心を堅固にすれば清淨極樂なるべき者也。

是れ取りも直さず彼の一生によりて實現せられたる信念主義たる也。彼れは是の信念と主義とを説くに口を以てせずして身を以てせり。所謂る身讀體達の旨義是に到りて全しと謂ふべし。言説徒に煩はしく見思の惑未だ去らざる吾人の如きもの深く彼れに就いて學ぶ所あるべき也。

(三十五年七月)

雜談

◎當代の煩瑣凡俗なる思想界に反抗して美育社の一團體を組織したる黒田湖山君はこの頃大學攻撃と云ふ一小説を著はした。讀むで表題の如く今の帝國大學の攻撃を目的とせるもので一篇の主腦は最後の章に於ける人本義之進の大氣



媚にある。小説としての技倆は大に未だしき處があるが、著者が其の平生の主張を托せるものとしては多少の成功を認むべきである。唯著者の大學觀の餘りに單純なる、如何ばかり青年學生以外の例へば大學當事者の如き人々を動かし得べきかは、頗る疑問と云はなければならぬ。

◎世間で大學の攻撃をする人は随分多いが其の攻撃の肯綮に中れるものとは極めて稀に見る所だ。畢竟、ロクに大學の門戸をも窺はぬ人が不十分なる材料を嫉妬や憎惡の偏見で、コネ廻はした結果に過ぎないからだ。我輩は大學出身の故を以て辯護するものでは決して無いが、淺薄な見當違ひの批難には同意するところが出来ない。

◎例へば世間の攻撃で一番聲の高いのは今の帝國大學が人物を養成しない、と云ふにある。成程一應は尤もに聞えるが扱て大學の事業として如何にして人物の養成が出来やうか。例へば工科の學生が器械や製圖もしくは採鑛冶金や土木工學を學びつゝある間に如何にして其の學問によりて人物を養成せらるゝことを望み得べきであるか。醫科の學生に生理學や解剖學の講義を授けつゝある間

に其の教師は如何にして是等學生の人物を養成することが出来やうか。

◎人物養成と云ふ様な事に一番縁の近いのは法科と文科とであると誰も思ふであらう。然しながら是れとても工科や醫科と同じことだ。商法や訴訟法の講義中に人物養成も何もあつたものでない。實驗心理やフナチツクの講義によりて人物が高まるものならば、それこそ摩訶不思議と云はねばなるまい。

◎つまり人物養成と云ふことは抽象的に大言する時は尤もらしい事ではあるが、その實際に立入つて考へて見ると今日の學制では決して行ひ得べきことでは無い。畢竟今日の大學は天下の人才を集めて職業上の教育を施す所と見るの外は無い。それ以上を望むは今日の國狀に伴へる大學の實際を知らぬものと云はなければならぬ。

◎斯んなことを言ふと、何やら教育家先生の口吻に似て居る様だが、世間の誤解に對して一應辯じ置くのみだ。然らば大學には缺點が無いかと云ふに、それは大有りだ。我輩の眼から見れば世間の攻撃などよりも遙に根本的な遙に實質的な批難が多々あるべきと思はれる。我輩は大學出身者として、學閥論者の一人であ



るが、さりとて今の大學に謳歌するものでは決して無い。此の邊の精しい所は他日必ず世に公表するの機会があらうと想はれる。

◎前號に掲げた日蓮上人と日本國と題する論文に就いて意見を寄せられた人が少からずあるが、中には日蓮宗の僧侶と覺ばしき人から嚴しき叱責を被つたものもある。成程國家的宗教を賣物にしやうとする人から見れば我輩の論旨はいさゝか好都合でないかも知れぬが、我輩の眼中には日蓮上人あるの外、別に今の日蓮宗と云ふものが無いから仕方がない。そして又眞に其の祖師上人の人物を會得せる人であるならば、我輩の意見に賛成をこそすれ、反對すべき理由は毫も無い筈と我輩は思ふのである。

◎日蓮上人の教理にはその根底に於て現世の主權と相容れざる明瞭なる特色がある。故に是の宗門の歴史を案じて、其の最も盛大を極めたのは戰國時代で、取も直さず一國の主權が定まらず、是の宗門と衝突すべき當體が未だ世に現はれざる時代だ。然るに信長より秀吉、家康と、日本國がやうやく一主權の下に統率せらるゝと同時に、是の宗門は追ひつゝ、迫害によりて衰頽に赴いた。その精しい史

續は茲に述ぶる邊は無いが、日宗學者の夙に心附いて居らるゝ所であらう。

◎若し日蓮宗にして嚴正に率直に其の祖師の主義を實行したならば、現世に其の法鼓を鳴らし續けることが頗る難事と云はなければならぬ。國家は畢竟野獸の大なるもので、到底是の如き信仰の弘通を看過するの雅量などのあるものではない。幸か不幸か、從來の日蓮宗僧侶はこの嚴正率直の意氣がなく、妙宗信徒の盡すべき本分を盡さなかつたが爲に、兎も角一宗派として、お茶を濁して來られたのである。今日此の宗門の革命的維新を論じつゝある人は、即ちかゝる曖昧なる態度を捨て、祖師上人の原始的精神を復活せよと唱ふる復古的運動であるのだ。

◎日蓮宗中に不受不施派と稱ふる一派があつて今日のところでは祖師の精神を尤も忠實に傳へて居る門派であるとの評判であるが、其の状態は實に見る影も無い。厘に備前の金川に妙覺寺と云ふ一寺を有するの外、日本中に一末寺をも有たぬ。是れが原始日蓮宗の必然の運命を示して居ると我輩は思ふのである。是の派の開祖の日興上人と云ふのは固く祖師の折伏主義を遵奉して、豐太閤の大佛の千僧供養にも、家康の發起した大阪の千僧會にも固く執つて出席しなかつた。



是れは邪宗の輩と祈禱を共にせず、謗法の君主の外護を頼まずと云ふ一大決心を示したものだ。斯様に主權の制裁を無視した廉で、上人は十三年の間對馬に流されて非常の迫害に遇はれたのである。

◎本號に掲げた姉崎嘲風の七月五日の手紙に續いて同じく六日の手紙もあつたが都合によりて引離して公にした。此の終りの手紙にはラスキンの演説を引いて、英吉利の國民が如何に其の警醒者の言葉に耳を傾くるかを稱揚して居る。此の演説の一節は我邦の教育界の時弊に適中して居ると思はるゝによつて左に抜萃しやう。

◎英國人は一般に教育に對して大なる誤解を抱いて居る。即ち教育を以て生活の一方便と心得て居る事がそれである。教育は利益の多い商賣どころでは無い。實に多くの費へを要するものである。最も立派な教育は利益の最も少い到底金錢上の勘定に合はぬものだ。何れの國民か其の偉大なる美術其の偉大なる智慧でパンをもうけたものがあらうか。パンは小さな技備や製造や又は實用上の

知識で得られるが高尚なる學術高尚なる哲學又は高尚なる藝術は金を出して買ふべき寶で決してパンの爲に賣るべき貨物では無い。國民教育の爲には大に費すべきであるが是に依て得る所のものは金でなくて人物であることを覺悟せねばならぬ。此の人物は即ち諸君の金に値するもの英國の寶である。

◎我邦の教育者殊に私立學校の教育者はラスキンの是の言葉に深く省みる所があらなければならぬ。彼等は教育と云ふことを餘りに廉い者と心得て居る。高が生徒の月謝で維持が出来三十萬圓もあれば三個の大學をすら建立することが出来ると心得て居る。斯んな風であるから教育を以て一種の商賣と考へて是の考へを實行して居る所謂教育家が甚だ多い。東京市内の私立學校の大多數は即ち其れなのだ。つまり彼等は米屋となり下駄屋とならない代りに學校屋となつたのみで、其の外に何の意味も無いのだ。斯う云ふ連中が如何にしてラスキンの所謂る國家の寶を作り出すことが出来やうぞ。

(廿八年五月稿)

◎先頃ゲオルグ・ブランデスの論文を讀むた所が中に國民主義に關して面白い



観察があつた。今左に其の概略を諸君に紹介しやう。

◎十九世紀の中頃より今日に到るまで世界の民衆主義であるとは言ふまでも無い。國民主義は言ひ換れば人種主義だ。同人種互に相結合して各々血族團體を造つたのが畢竟前世紀の主要なる政治上の事件であつたので、國民の争ひも所詮は人種の争ひに外ならぬのである。斯かる世の中で、是の國民主義と矛盾せる幾多の事實が公々然として認められて居ることは頗る面白いでは無いか。

◎第一。少くとも歐羅巴の四大國民の名は何れも皆外國の名である。即ち佛蘭西と云ふ名稱は萊因河の兩岸に棲んで居つたフランク人から來たもので、是の國民の祖先たる古のケルト人とは何の因縁も無いものだ。本來ならばガリアとかラテンとか名告るべきであるのがフランスとは實に奇だ。英吉利の名は素と獨逸の一地方から來た名で、アングロサクソン民族と何等血族上の聯絡が無いのである。魯西亞てふ名は素と北方の起原で、スカンデナビアの一民族たるロセルチから轉訛したのであるから、無論今の魯國人の祖先とは關係は無い。普魯西は

素とはプロイセンと云ふスラブの一蠻族の名で、十二世紀の終り頃に獨逸に入つたのである。

◎第二。所謂國民的英雄の多くのは他國人若しくは他國人の子孫である。例へば澳地利のオイゲン公はサボイの人で、チリはバイエルンの人。又匈牙利の英雄ベムは波蘭人で、佛蘭西のモリッツは獨逸人である。奈破翁は伊太利人で、璉馬の豪傑トルデンスキョルドは那威人である。斯んな類は外にも中々多い。

◎第三。所謂國民的詩人、美術家の中にも外國人が甚だ多いのである。瑞典の國民詩人ベルマンはブレメンの人で、璉馬國の大彫刻家トルフルゼンはイスラントの人。又オレンシレゲルは父側も母側も共に獨逸人である。同じ國の作曲家として名高きクラウモエゼも何れも皆獨逸人の子孫だ。ヘンリックイブセンと云へば那威を人が想出だすであらうが實は璉馬の漁師の家から出た人で、血統上からは純然たる獨逸人だ。魯西亞の大彫刻家たるアントコロスキは父母とも純然たる猶太人である。獨逸人の誇りとするハイチもビルチも共に猶太人で其



の他、學者ではカントは蘇格蘭人、スピノザは猶太人。又近くは社會主義の素斗たるフエルデナンド、ラサルやカル、マルクスも、又天才論を以て名高き人類學者ロムプロゾも皆何れも猶太人である。

◎第四。一國の司配者若くは權勢者が外國人である事例の甚だ多いとは、最も興味ある事實である。魯國を司配するロマノフ家は素と獨逸のホルンスタインから出たので、瑞典、那威の司配者たるベルナトト家はガスコニーから出たのだ。支那人の帝王と仰ぎつつあるは漢人種に非ずして滿洲人である。璉馬の皇子と魯西亞の皇女とは希臘皇太子の兩親であつて、獨逸帝室の一公子とキード公女とは何の因縁も無きルマニア人の上に君臨し、澳太利の太公女は西班牙の攝政となり、ブルガリアの國母は佛蘭西のオルレアン家の出である。王室以外に就いて見ても、マザリンも、奈破翁も、ガンベッタも何れも素を糺せば佛蘭西人では無い、英吉利のデズレーリは云ふまでもなく猶太人であつた。愛蘭の無冠の王とまで稱せられたパーキルは愛蘭人で無いのは素より、愛蘭人の屬して居るケルト人でもなく、全く彼等の敵なる英吉利人であつた。

◎ブランドスは是等の事實を擧げて、國民主義や人種主義の行はれつつある今の時にかゝる事實の存することは左程怪むべきでは無い。人道主義、非國民主義の大なる眞理が是間に其の一端を現はして居るのであると結論した。

(三十五年十月)

◎東本願寺は何時までごたつく事か。世間では恰も國家の大事件で、もあるかの様に騒ぎ立てるが、謂はゞ地方の豪家の相續争の様なもので、左右甲乙何れでも好いではないか。

◎東本願寺は一個の宗門として果して改革し得らるるものであるか。是れ我輩の大に疑ひ怪む所である。今の所謂改革運動の如きは、俗僧等が俗權財力の分配を争ひて種々の醜態を演ずるに過ぎずして、毫も宗門信仰の問題と關はる所がない。

◎今日東本願寺の如き大宗門が滅亡することは其の僧侶信徒乃至關係者にとりて非常の打撃であるであらうが、日本の宗教の爲には寧ろ是の如き宗門の存在



を不幸とすべきではあるまいか。迷信、偽善、奢侈、淫佚、墮落、腐敗、一切の悪徳の積聚とも見るべく、新時代の人心を傾倒せしむる譯には行かないのである。一日是の如き宗門の存在を長うせば、一日我が宗教の腐敗を甚しくするのみだ。我輩一個の考では、今の老法主君が益々健全で、其の法位に居ります。其の淫修を極め、ますます其の負債を殖やし、是の老賣女の如き宗門を一日も早く瓦解し了らむことを希望するものである。

(廿五年十月)

無題録

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此世に續きたり、斯くて人は是の平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるに非ざる乎。

怪むを要せざる也。鮑魚の中に入るもの、久しうして其の臭きを忘るゝが如く、彼等は凡ての物に對して驚きの心を喪へりと覺ばし。憂へあれども憂へず、悲みあれども悲まず、疑ふべきに安じ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此世の上下に

充ち満つれども、彼等恬として省みず。たゞ、名聞利養の外に世間又疑惑なるものゝ存するを解せざるものゝ如く然り。嗚呼人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

○ 現世に於ける一切の學智と道德とは其の根底に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして附隨し、審判せずして讚美し、戒飭せずして阿從す。一代の文教證し來れば現世の註釋に外ならざるのみ。

○ 山に入て山を見ず。此の世の真相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の學智と道德とを離れ、生まれながらの小兒の心を以て一切を観察せざるべからず。

嗚呼小兒の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式方便、習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の道德、學智の繁縷に累はされず、たゞ、本然の至性を披いて、天真の流露に任かすもの、あゝ、獨り夫れ



小兒の心乎。  
 吾人素と學無く才無し。唯野性の生まれながらにして移し難きものあるのみ。  
 年來人に離れ世と絶し藐然として天地の間に嘯く。潜に想ふ是の心それ或は小  
 兒の心に還からむ乎。願はくは依て以て聊か平生の疑惑を陳べ録して大方の教  
 を請はむか。

人の生を求むるは此生に價値を認めれば也。即ち知る人生畢竟價値に外なら  
 ざるを。

人生既に價値也是を以て人生の歸趣は常に最大の價値と相伴ふ。最大の價値  
 の存する所即ち是の價値の所有者にとりて人生の全意義の包括せらるる所也。  
 至上の幸福茲にあり最高の道義亦茲にあり。絶對也無上也。苟も自我の存在す  
 る限り天上天下無二亦無三の尊貴也。人は是が爲めの故に執着し欲求し煩悶し  
 戰闘す。時として繼ぐに死を以てして悔むざる也。豈嘗に悔むざるのみならむ  
 や彼れは是の如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶ也。

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く生くるは價値の爲也。即  
 ち最大の價値と共に生き又死するは理の當然にして事の必至也。  
 是の如くにして吾人は是の世に生死する能はざる乎。

世に道德なるものあり吾人の行爲を判決して善惡是非の目を立つ。人は是の  
 判決を愕れて偏に其の則に違はざらむことを是れ力む。知らず是れ果して何の  
 意ぞ。

人生の價値なるは既に是を了す。而して記せよ價値はそを有する者のみの價  
 値也。能持の主體を離れて世間又價値なる者の存せざること猶ほ眼を去りて色  
 なく耳を外にして音無きが如し。即ち價値の物たる主觀的也。

音に主觀的なるのみに非ざる也。價値は畢竟個性の反應に外ならざるを以て  
 同一事物は必ずしも凡ての人に對して同一價値を有すること能はず。即ち價値  
 は主觀的なると共に個人的也。

既に個人的也是を以て價値の物たる與ふべからず受くべからず。辯以て強ひ



難く力以て傳へ難く言説理解を超越して人々自ら自得するの外無きのみ。換言すれば價值は自ら創造し得る者にして初めて其の所有者たり得べきのみ。人生既に價值也而して價值の主觀的にして個人的なる亦既に是の如し。畢竟生を此の世に享けて茲に自ら人生の價值を造り其の價值の最も大なるものに隨つて安住の地を求めむと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。他の目して善と云ひ惡と云ふ吾に於て何の關はる所ぞ。若し道德の目的にして最大の幸福を與ふると云ふにあらば吾人は既に是の如き道德の實行者たるに非ずや。豈嘗に實行家たるに止まらむや更に又其の創造者たるに非ずや。

試に是の言を録して道學先生の座右に呈せむは如何に。

是の如く言はゞ難者必ず言はむ無數の民衆は汝と共に此世に共存せり。社會是が爲に起り國家是が爲に立つ。所謂る道德は是等凡ての民衆の幸福の爲に存する也。汝の言ふ所の如きは是れ汝一人の事のみと。

嗚呼汝一人の事は何故に爾かく重しとせられざる乎。吾れは吾れ自らの爲に

生きずして抑々何物の爲に生くべき乎。吾人は必ずしも社會國家を輕しとせざるも而かも吾れ自らの重きに比すべからざるを思ふ。他愛可也博愛又妨げじ。畢竟唯是れ意識上の問題のみ。換言すれば一個の客體としての社會等は吾れに於て没交渉也。唯是の客體にして吾が主觀上の事實となり茲に吾が生存の上に於て多少の價值を認めらるゝに及びて吾と彼等と初めて亦多少の關係を有し來るべきのみ。吾人は是の意味に於て與衆を認容し國家を認容す。畢竟外より吾を折くに非ずして内より彼等を攝するのみ。是の攝折の意義を解せざる人は未だ會て個人の尊嚴を解せざるの人也。

吾人會て曰へらく三千法界を以て是の一念に攝す道義初めて語るべしと。即ち是の謂のみ。嗚呼今の道學先生の幾人か果して能く這般の消息を解し得べき。

(卅五年十月)

雜談

◎今の時文藝學術宗教教育等の社會に會と名のつくものが甚だ多い。曰く何



々會曰く何々協會曰く何々研究會——もし各部面に涉つて仔細に計へるならば、恐らくは驚くべき多數を示すであらうと想はれる。實に今日は會の全盛時代である。少しく地位名聲ある人にして兩個三個の會員を兼ねないものは殆んど無いであらう。

◎凡そ會なるもの、設立の趣旨は極めて尤もだ。團體結合の力によりて個人の方に成し遂げ難き事業を成し遂げやうとする、趣旨や實に明瞭適切を極めて居る。然しながら我輩等の眼から今の所謂會なるもの、實状を見るに、其の多數のものは是の目的を達することの望みより頗る遠ざかつて居るのみならず、却て其の會員たる各個人の獨立心を消耗し、無責任の惡風を助長し、延いて着實誠意の氣習を滅殺しつゝあると云ふ極めて歎かすべき事實を認むるのである。

◎人々相依頼するは素より可唯自家應分の責任を分たずして漫に人によりて事を成さむとするは既に是れ碌々たる小人の根性である。今の所謂會なるものには概ね是の弊がある。是れは會其物に規律なく制裁なきの致す所でもあらうが、其の大いなる病根は會員たる個人各個が個人としての獨立心責任感に缺乏

して居るからである。個人の價值尊嚴を自覺せざる人が幾人集まらうとも決して有効なる團體の組織せらるべき謂はれは無いのである。

◎其の證據には文藝學術等の社會に於て幾何なる大事業が今日の所謂會なるものによりて成し遂げられたる實例があるか。大いなる著述もしくは發見を成したるものは常に個人であるでは無いか。久しい以前より何々調査會と云ふ様なものは世間に随分あるが、其の所謂調査なるもの、結果が世人を満足せしめた例しは果して一回だにも有つたのであるか。其の任命せらるゝ委員の顔觸れなどは實に立派な者であるが、彼等は政府の與ふる長き歲月と厚き待遇によりて吾々を満足する様な報告をもたらしたことは一度も無いでは無いか。

◎凡そ如何なる事業に於ても個人の精神の籠らぬものには決して眞の生命があり得るものでない。獨立心なく無責任なる多くの頭數ががや／＼集まつて釘釘補綴して拵へたものなどは造り花や寄木細工の様なものだ。我輩は今日流行する會を惡むものである。彼等は多數の名の下に責任を没し時間を徒費し誠實を切賣りし延いて一般個人的事業の上にも是の惡風を及ぼしつゝあるのである。



◎序に云ふが會頭又は總裁等の名の下に縁もゆかりも能力も誠意も無い高位高爵の人などを戴くはそもく何の必要があるのか。唯是れ其の所屬會員の風俗卑劣なる心情を暴露するの外に果して何の意味があるのであるか。

◎先達來女學生の醜聞と云ふことが殆ど社會の一つの呼聲となつて居るが斯んな譯の分らぬ話はない。女學生として何も天人やエンジェルばかりではあるまいし百人と千人と聚まつた中から十人や二十人の不品行者を出したからと尋常一様の世間並の出來事何の不思議も無いのである。

◎男子の學生を觀るが好い。帝國最高の教育府たる帝國大學の學生中で、少くとも一割は花柳病に冒されて居ると云ふ事實は果して何事を示して居るのであるか。社會は驚きもせず、教育者は怪みもせず、其の狀恰も男兒には不品行を行ふの特權があることを認めて居るものゝ如しである。而して一方に於ては、百中一人の不品行あれば即ち直に女學生の墮落呼はりをするのは没分曉の極みと言はなければならぬ。

◎我輩が今の女子教育に懽焉たらざるは斯様な些々たる不品行の點に非ずして寧ろ其の取締の嚴酷に失するの點にあるのである。例へば高等女子師範學校の例を見るが好い。學生は一步でも門外に出る時は必ず保證人の證印を要するのである。即ち何時何分より何時何分までは某々の處に居つたと云ふ事實を認めて、是に一々保證人の證明を附せねばならぬのである。又例へば夏季休業で歸省すると云ふ様な場合には學生の乗用に供する人力車夫は保證人の證明を持つて居るものに限るのである。一にも保證人、二にも保證人、學生の身體は場所に於ても、時間に於ても、殆ど凡ての自由を失つて居る實に憐れな有様にあるのである。◎是の如く憐れなる處女より其のあらゆる自由を取り去らねば、女子教育は果して成し得られざるものであるか。學校當局者は其の學生を見るや殆ど前科者兇狀持の如くである。一個婦人の人格の上に大侮辱を加へつゝあるのである。彼等は女學生各個に相當の自由を與へて應分の責任を有たしむることを考へず、唯々外より是を束縛して俸々として過ち無からむとを期するのみである。あゝ是の如き個人の獨立責任を没却して徒に外より是を壓迫するは果して二十世紀の



教育法であるか。是れによりて所謂る不品行を防遏することに於て多少の効能があるかも知れぬ。然しながら同時に卑屈、因循、姑息、無責任の悪氣習を是等女學生に吹き込むことの如何に大なるべきかを考ふれば、其の利害得失果して何れに在るか蓋し智者を待つて知るを要せざることであらう。

◎要するに今日の女子教育者は勿論のこと、世上の批評家新聞記者などもイマ少し肝玉を大きくして貰いたいものである。

◎外國漫遊が吾人に新知識を與ふるや素より論は無い。唯近時頻りに吾邦に見る所の如き無學無能なる老廢者の一輩が志を國內に得ざる時もしくは忘却せられむとする恐れある時には、則ち事に托して海外に遊び、半年一年にして歸り來れば、先に其無能無識を笑ひたる世間では所謂る新歸朝者として盛に彼れを歓迎し、其の人物の上に新しき値價でも生じたかの如く、追從尊敬至らざる所無きが如きは頗る奇怪の現象と謂はなければならぬ。

◎數月前、在倫敦の我輩の一友人が送り越した手紙の端に斯んな意味の文字があつたのである。

(前略)此日子は例の如く大英博物館の畫廊に於て半日を暮らしぬ。會々東洋某國の元老伯爵と稱する白髮の老人が一二の從者を隨へて予の坐せる椅子の前を通過せり。あゝ君よ、少しく文藝に志ある吾等の如きものにとりて一日二日其の前に立ちつくすも飽くことを覺えざらむとする此の稀代の傑作の前をばかの元老伯爵とやらむは傍目も振らず過ぎ去り給へる也。云々。

◎吾々は是の手紙に描かれた様な元老伯爵が我邦の元老中にあらうとは素より想はない。然しながら彼れ等老朽者の多くが是の元老爵と相去ると甚だ遠からざる人物であることは、蓋し疑ふことの出來ぬ事實であらう。一枚の畫などは素より如何でも好い。唯事一國の文藝に關はるものとしては、文明の觀察者にとりて極めて重大なる意義を有し來るのである。文明は法制や軍隊や財政や工業の上にのみ現はるゝものでない、其の心髓は文藝、宗教、社會、學術等の么微に於て初めて認識し得らるゝのである。深大なる素養と同情とを要するは言ふまでも無い。然るに我邦の政治家や元老など、呼ばるゝ輩は政家年鑑一冊を懐にして、其送別の席上では及ばすながら歐米文明の内部に立ち入つて其の真相を觀察するなど



と廣言して居るのである。

◎其れで渡航後の消息を聞くに、或は帝室の晩餐に招かれたとか、優渥なる勅語を賜はつたとか、某の大臣と會見したとか、某の學者、事業家に面談したとか、到る處の官民に盛大なる歡迎會を受けたりとか、銀行や製造場を見るに都合がよかつたとか——まあ斯んな風な紋切形に過ぎないのである。何處の國に通じ、一遍の客に满腔の經綸を傾けて話しをする人もあるまいし、其の談話、意見、演説なるものは、つまりは互に御定まりの外交的辭令を交換するに過ぎないことは論のない事である。斯んな風で世界の國を巡つたとして、決して世界文明の上に幾何の知見を開拓することが出来やうか。

◎然るに驚くべきは、是の如き漫遊者にして、半年一年の後其の本國に歸り來れば、我邦人は所謂る新歸朝者として非常なる熱心を以て彼れを歡迎するのである。新聞記者は上陸するや否や争つて彼を圍繞して其の意見を叩き、諸種の協會團體は争つて彼れを招請して其の新知識を聞かむ事を望み、數月前までは殆ど世の記憶外に在つた彼れは、是の漫遊によりて俄に新生命を持たらしく、社會の一勢力となつた。

なりたるの觀あるは、現に吾々が是まで數々見たる所の事實である。かへすくも不思議な現象だ。

◎鷲鳥は幾たび萊因河を渡つても、風風にはなれるものでない。老廢者や無能者は幾度び世界を巡つて來ても、矢張り素の老廢者無能者に過ぎないのだ。歡迎追従するものは素より爲にする所があるからであらう。然れども彼等の淺薄なる觀察談などを珍らしげに世の中に吹聴させるのは、最も悪い洒落と謂はなければならぬ。

談 雜

◎あらゆる學術は常に奴隸的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すれば、それで好いのである。◎問題の提供者は時としては自然である、又時としては天才である。學術は常に是れ二者の何れかの奴隸である。

◎迷信は世人が騒ぐほど左程怖るべきものには無い。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道徳説である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鳩毒



を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はシッペンハウエル、ニイテを苦めたのも、皆是の道德説の爲せる業だ。

◎昔は犠牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることゝなつた。彼等の口無きが故に世は平和に見ゆれども、實は死滅に近づきつゝあるのである。

◎迷信は力である。ダンバーの戦を人が出来事と言つたのに對し「是れ人事に非ず神事也」と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫んで一世を警めたが、今日の學者などの眼には是れ程大いなる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯ふ思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いのである。唯必要なるは精神である。赤誠である。不惜身命の大勇猛心である。

◎今の人は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大いなる禍と謂ふべきであらう。

◎大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは其の一つである。己れの大きいなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼れは釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁ニイテの信條である。

◎人を脱して神となる己れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる己れの大きいなるを信ずる所以である。

三十五年十一月



楞牛全集第四卷終

故高山楞牛没してよりまことに一ケ年たむとするの今日吾等同人相寄りてこゝに楞牛會を組織し敢て大方の贊助を請ふ所以のものは畢竟故楞牛のために紀念事業を起し其紀念の庭園を以て宗教文藝に志ある人の自由なる集會所となし此に依て亡友の志業を繼紹せむと欲する微意に外ならず想ふに清新の氣風、宗教、文藝の勃興天才の憧憬等は吾等の推獎を俟たずして自から生れ出でんことは自然の數なるべけれども聊か亡友の紀念事業を中心として精神上的の文明の爲に努力したき念願と故人に對する吾等の友情とは期せずして同人の一致する所と成り終に左の如き規約の下に楞牛會の成立を見るに至りぬ願くは吾等の愚衷を洞察してこゝに此舉に賛同あらん事を江湖諸兄弟に祈る

楞牛會規約

- 一、本會ハ故高山楞牛ノ爲ニ紀念事業ヲ舉ゲ并ニ之ニ必要ナル金額ヲ募集スル爲ニ組織ス
  - 二、紀念事業ハ當分左ノ事項ヲ目的トシ便宜ニ從テ之ヲ遂行ス
    - 一、楞牛ニ關係アル地(多分鎌倉)ニ紀念ノ庭園ヲ開ク
    - 二、園内ニ紀念標ヲ建テ及ビ本會ノ家屋ヲ建築シ之ヲ楞牛關係ノ書類ヲ蒐集スル場所及ビ本會會員ノ集會所ニ宛ツ
    - 三、龍華寺ナル楞牛埋骨地ノ造園ヲナス
  - 三、本會ノ事務ハ當初ノ發起人ヨリ成ル幹事會ニテ處理ス
  - 四、當初ノ賛成人ヲ以テ本會ノ評議會ヲ組織ス
- 評議會ノ開閉ハ幹事會之ヲ管シ幹事會ハ其決議ニ從テ本會ノ事業ヲ舉グ



發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

明治三十八年八月十五日印刷  
明治三十八年八月十八日發行

第四卷時勢及思索  
定價金壹圓五拾錢

著 作 所 有

編輯者

齋藤信策

發行者

大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
水谷景長

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
博文館印刷所

五、本會ノ爲ニ金壹圓以上ヲ寄附シタル人及本會ノ爲ニ盡力シタル人ヲ本會々員トス  
會員ハ本會ノ集會ニ出席シ及ビ圖ヲ使用スルヲ得  
六、紀念圖開闢式ヲ舉グルノ日ヲ期シテ本會ヲ財團組織トナス

發 起 人

長谷川誠也 藤井健治郎  
登張信一郎 姊崎正治  
畔柳都太郎

明治三十六年十月

贊 成 人

井上哲次郎 井上圓了 井上準之助 巖谷季雄  
大町芳衛 大橋新太郎 長田忠一 玉蟲一郎  
田中喜一 田中智學 坪内雄藏 坪谷善四郎  
上田萬年 上田 敏 桑木嚴翼 佐々政一  
笹川種郎 三浦菊太郎 島 文次郎 新城新藏  
守本文靜 菅沼達吉

追て本會會員となり本會の爲に義金を投ぜらるる諸君は出金額と住所氏名とを東京小石川指ヶ谷町七十八番地姉崎正治に申込みありし又本會は勸誘員集金人の類を差出さるるにつき出金は直接右姉崎に申込み又は送金あらん事を乞ふ

本會學術講演は第一回を明治三十六年十月廿一日第二回を二月廿四日に開き其より以後便宜東京諸區并に地方諸都市を巡回す地方にて右講演開會希望の向は右姉崎に申込みを乞ふ

東京市小石川指ヶ谷町七十八番地



故文學博士高山林次郎君著 (三十七年一月既刊)  
東京帝國大學 文學博士 姉崎正治君 文學士 齋藤信策君共輯

# 樗牛全集 美學及美術史

△高山博士寫真挿入▽  
紙數五百 正價金壹圓五拾錢  
五十二頁 小包送料拾五錢

## 美學上の理想説に就いて

美學上の理想説に就いて 美意識と真意識 美意識と善意識 美感と快感 美感の無關心性 美感の身心の全部 再現と快感と功利との一致九餘論 月夜の美感に就いて 月夜の美感の三大要素 月光と青の色彩 青と緑 青と紫 青と赤 青と褐 美感の不定 感情の共鳴 月夜と日晝 月夜の世界と月光との調和 聯想 過去の追憶と遠人の思慕 其他の原因 宗教と美術 詩歌の所縁と其對象 歴史畫題論 序論 風原 歴史的原 歴史的信仰 歴史の歴史 日本畫の過去及び將來に就いて 序論 繪畫の一般性質より由來せる畫題の制限 歴史畫の本領 歴史畫の再び歴史畫の本領及び題目 序論 繪畫の一般性質より由來せる畫題の内容 東洋歴史畫題に就いて 坪内先生に與へて三度歴史畫の本領を論ずる 序論 繪畫の一般性質より由來せる畫題の制限 歴史畫の本領 歴史畫の審美綱領を評す 藝文の文章 譯語 簡單主 義の弊及び措意の適否 總評 自然美(斷片) 壯美及び優美(斷片) ●優美 外界の

## 日本美術史

總論 日本美術の特質を論ずる 歴史上の特質 技巧上の特質 奈良朝以前の美術 上代 推古朝 總論 彫刻 繪畫 法隆寺 天智式の美術 總論 美術家 藥師寺 天平時代 藥師寺の文化概見 藥師寺の佛像の形式と流傳 佛式との關係 印度と希臘との歴史上の交渉 健甕の佛像 平安朝時代 巨勢家 彫刻 平安後期 總論 繪畫 總論 僧空海 百濟河成 彫刻 (下) 延喜以後 總論 繪畫 挿入 版 (一) 古代石室 繪畫 (木彫) (二) 古代石室内の畫 (著者スケッチ自筆) (三) 鞍部島作法隆寺金堂釋迦三尊 (寫真) (四) 法隆寺金堂壁畫 (寫真) (五) 天宮國受茶室 (著者スケッチ自筆) (六) 藥師寺藥師三尊 (寫真) (七) 在法華堂大佛殿形 (寫真) (八) 東大寺三月堂觀音 (寫真) (九) 同堂本尊不空羼藍觀音立像 (寫真) (十) 藥師寺東院聖觀音立像 (寫真) (十一) 東大寺戒壇院天王像 (廣目天寫真) (十二) 法華寺十一面觀音像 (寫真) (十三) 藥師寺東院聖觀音立像 (寫真) (十四) 新藥師寺藥師十二神將 (寫真) (十五) 彌勒菩薩 (著者スケッチ自筆) (十六) 佛陀 (著者スケッチ自筆) (十七) 同上 (十八) 同上 (十九) 鎌倉大佛 (木彫) (二十) 南方印度の女神 (同上) (二十一) 佛陀 (著者スケッチ自筆) (二十二) 藤原隆盛畫 (寫真) (二十三) 慈心僧都畫 (二十五菩薩來迎挿圖) (寫真) (二十四) 定朝作平等院木尊阿彌陀如來 (寫真) 参考 次 目 萬朝報社 文學博士 故高山林次郎の遺文集也編輯の任に當れる者は實弟齋藤信策と彼が生前互に相許し、姉崎朝風の二人彼等昨夏著者が生前の交友を會して遺文編纂の方針を協定し其第一卷として出したるは彼が深博宏遠なる論評の中にも最も特色を有する美學上の研究に關する論文十數篇と日本美術史未定稿を納めたる此卷なり、文藝の發達に多大の貢獻を爲し、彼が事業を永久に忘るゝ能はざる予輩は先づ編纂の勞を多謝すると共に彼が思想を慕ひ彼が文意を愛する者に對して今更めて此集の紹介を爲すは決して徒勞にあらじ、先づ美學上の研究に關する者の中に最も見るべきものは「美感に就いての觀察」月夜の美感に就いての二篇と歴史畫に關する四種の評論等なるべし、就中月光美に就きて物せる一文の如きは單に一種の感情文として觀るも詩味饒かに興趣限りなく予輩の嘆賞して措かざる名文なるが其他何れも當時の評壇に新らじき題案を供し論議の盛觀に無前の光彩を添へたるものにして予輩は今此集を編むに方り其會つて再誦し三誦したるものが更に新なる有題の文字に接するが如くに思はれ時と共に消滅し去るを例とする時文の中に永久の生命を發見せらるゝが如き彼に對する追慕の感を一層強く且つ深からしむるものなり、未定稿「日本美術史」は天平以前の美術に始まり平安朝の後期總論に至りて筆を擱きたれば彼が燃原の批評眼に最もふさはしき近世の美術が明治の過渡期に入りて特種的發展を成し行く興味ある叙述に接し得ざるは予輩の歎なからざる遺憾とする所なれ共之を一部の上代美術史として見なば稍完全なる何の不足も言ふに及ばざるべし其本邦上代の審美的理想を評して積極的に快調光明をむれとせりと觀し消極的方面には沖瀟幽寂を貫んじたりと謂ひ而して思想の發展上必然の結果として壯大の氣を缺き悲壯の感も缺き、爲に骨法のみを重んじて明晰遠近設色の巧を疎外し寫生畫寫眞畫の發達を阻害したりと説けるは甚だ吾人の意を得たるものなり予輩は専ら上代の美術を研究せんとする一般美術家に對して古き美術に對する最も新らしき批判を下し、本書を編むるに躊躇せざるなり



樗牛全集 藝及史傳

卷上 △高山博士寫真挿入▽  
紙數 正價金壹圓五拾錢  
一千頁 小包送料貳拾錢

●文藝時評 (文學と人生) (近松集林子)

(三十八年三月既刊)

(甲) 明治二十八年九月より同二十九年九月まで  
運命と悲劇○歴史的精神○研究の道念と観念○詩人と模倣と天然○文學と美術○日本西洋兩齋風の折衷○文化の關聯○天才論○叙事詩と叙情詩○何故に叙事詩は出でざるか○戯曲に於ける幽霊○退壇に臨みて吾等の抱懷を白す、

(乙) 雜論

文學會漫評○青年文人の厭世觀○武島羽衣の「小夜砧」を評す○演劇界の風潮と劇評家の責任○美術と道徳○「文學界」の諸君子に寄する書○敢て日本美術史の編纂を促す○批評眼○明治二十八年の文學界○少壯漢學者に告ぐ○宗教小説○裏面の觀察とは何ぞや○女性作家に望む○賞鑑家と國民○時好と批評家○春の家が「桐一葉」を讀みて○寫生と寫意○思想と畸形○大塚文學士を送る○今日の詩體詩家を警醒す○畫談一策○美學史及美術史○一葉女史の「たけくらべ」を讀みて○俳句及狂詩○俳句と符號俳句○鑑定家と批評家○鷗外に答ふ○一葉女史の「われから」を讀みて○俳句を送る○市川新藏○今戸心中と情死○能樂會○能樂の性質○脚本の批評法○田山花袋の「わすれ水」

第一期 第

(甲) 明治三十年六月より三十二年七月まで

我國現今の文學界に於ける批評家の本務○明治の小説○所謂社會小説を論ず○支那文學の價值○春の家主人の「牧の方」を評す○坪内逍遙が「史劇」に就ての疑を讀む○史劇に關して再び逍遙に答

二期 第三期

(乙) 雜論

ふ○小説革新の時機(非國民的小説を難す)○詩的の兩面と其利弊○カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて○ワルト、ホツイトマン(再び)○偽詩人とは何ぞや○文明の裏面○時代精神と大文學○友人某に與へて昨今の文壇を論ずるの書○土井晚翠に與へて當今の文壇を論ずるの書

○明治三十四年七月より三十五年一月まで

文明批評家としての文學者(本邦文壇の側面觀)○姉崎嘲風に與ふる書○作文論○現代文章私見○嗚呼風俗改革○笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す○「元祿時勢粧」を讀む○元祿時代の側面觀○土井晚翠を送る○大橋乙羽を悼む○美術の保護者○將來美術界の一問題○留學生諸君を送る○無題錄○三十四年の文藝界○文藝雜誌○藝苑瑣談○裝飾と日本美○雜誌○詩書の誘惑○新聞記者の資格○ビョルソンとゾラ○疑問○たそがれの辭○一葉舟を讀みて○「國民の友」を惜む○滑稽小説の作者に告ぐ○自己の修養、漢文を書き換へよ○西郷南洲の銅像を評す○民族傳説の蒐集○新建策と美術○評家及作家としての不知庵○藝術の尙古主義○詩人と批評家○木村應太郎君に與ふ(富士新聞の發刊に際して)○本邦文章の問題○我國演劇の前途に就て○明治卅二年に於ける小説界の傾向を論ず○連山人の日本お伽噺○言文一致の標準○自國の作を讀まざる風○小説の意義○少年の文學熱○煩瑣學風○煩瑣學風と文學者○人名辭書中の文學者○人の出處進退○學者と文章○詹々錄(一)(二)(三)(四)



樗牛全集 文藝及史傳

卷下

△高山博士寫真挿入△  
紙數 正價金壹圓五拾錢  
八百頁 小包送料拾五錢

本編は第二卷に收めたる文藝及び史傳の續編にして特に史傳に關する長編原稿の上卷に收め難きもの及び史傳雜纂と文藝評論の補遺等を收載す卷頭先づ釋迦と平相國の兩編を掲げ菅公傳之に次ぎ又史傳雜纂には南歐美術論、ナボレオン三世古事記神代卷の神話及歴史、シヤンメタルク、ハイ子が事、東北物語、世界の四聖、冠鑑日親、豪傑の半面、予の好める人物等あり、補遺又た二十餘種ありて著者が學界に雄飛したる時々の論議不朽の述作多く本編に收載せられたり其詳目を左に掲ぐ

釋迦

- 第一章 緒言
- 第二章 佛陀の誕生
- 第三章 宮中の生活
- 第四章 三苦
- 第五章 佛陀の決心
- 第六章 佛陀の出家
- 第七章 車匿及び乾陁
- 第八章 佛陀の學道
- 第九章 阿羅邏山人
- 第十章 成道
- 第十一章 佛陀の布教
- 第十二章 王舍城に於ける佛陀
- 第十三章 父子の再會
- 第十四章 佛陀の入滅
- 第十五章 附言

平相國

- 一 平家興隆の由來
- 二 清盛の前半生
- 三 一門の榮華
- 四 鹿ヶ谷の會合
- 五 重盛の諫言
- 六 重盛の最後
- 七 重盛論
- 八 法印問答
- 九 法皇の幽屏
- 十 源氏の勃興
- 十一 入道の最後
- 十二 清盛論
- 附 ○平家雜感
- 附 ○清盛骨相考

菅公傳

- 第一章 序論
- 第二章 菅原氏の傳統及少時
- 第三章 菅公の生れたる時代
- 第四章 菅公の性格
- 第五章 政治上の菅公其一
- 第六章 政治上の菅公其二
- 第七章 政治上の菅公其三
- 第八章 政治上の菅公其四
- 第九章 詩人菅公
- 第十章 菅公の崇拜
- 附 ●菅公年表 ●大隈伯が菅公談の後に書す ●菅公論に就て

史傳

- 南歐美術談
- ナボレオン三世
- 古事記神代卷の神話及歴史
- シヤヌ、タルク
- ハイ子が事
- 冠鑑日親
- 豪傑の半面
- 予の好める人物

雜纂

文藝評論補遺

戯曲に於ける悲哀の快感を論ず ○日本民族 ○特種と文學美術 ○青年小説を讀む ○喜ぶべき文壇の一傾向 ○吾が文學界に於ける道義的傾向 ○古寺院の寶物 ○新聞雜誌時代 ○人才と我文學界 ○美術に對する購買力 ○一刀兩斷の制裁曲 ○學阿世 ○今日の論文 ○西郷南洲の銅像を評す ○新建築と美術 ○天地有情を讀みて ○詩歌の所縁と其對象に關して難者に答ふ ○同上再び宙外に答ふ ○博物館論 ○古社寺及古美術の保存に就て ○美術と富豪 ○大佛露佛說 ○藝術の鑑査を論ず ○美術の保護者 ○美術に於ける人物の理想的表現 ○將來美術界の一大問題 ○消息 ○漫評 ○雜談 ○無題錄 ○藝苑瑣談 ○裝飾と日本美術 ○藤原時代以後の日本美術史概観 (以上)

11/6/40



文 武島羽衣君著 韻文 霓裳微吟

袖珍美本 正價參拾五錢 郵稅六錢

武島文學士が世の歌學者其他文學に、志すもの、爲めに歌に關する論說、敘事、隨筆、史傳を收輯して、一卷となしたるものなり。皆之れ山の峨々たるが如く、水の洋々たるが如く琅々誦すべきものならざるはなし。

文 士 井晚翠君著 天地有情

袖珍美本 正價貳拾五錢 郵稅四錢

峨々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし。此集君が吟哦を録して、一冊に美麗の冊子を成す。詩の中別に一旗幟を樹立するもの、詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ。

大和田建樹君著

韻文 藻 鹽 木

袖珍美本 正價廿五錢 郵稅六錢

國府 岸 東君著

新體 花 さくろ

袖珍美本 正價卅五錢 郵稅六錢

文學士 鹽井雨江君著

韻文 暗香疎影

袖珍美本 正價廿五錢 郵稅六錢

佐々木信綱君、印東昌綱君合著

韻文 磯 馴 松

袖珍美本 正價廿八錢 郵稅六錢

鹽井 武島 大町三文學士合作

韻文 花 紅葉

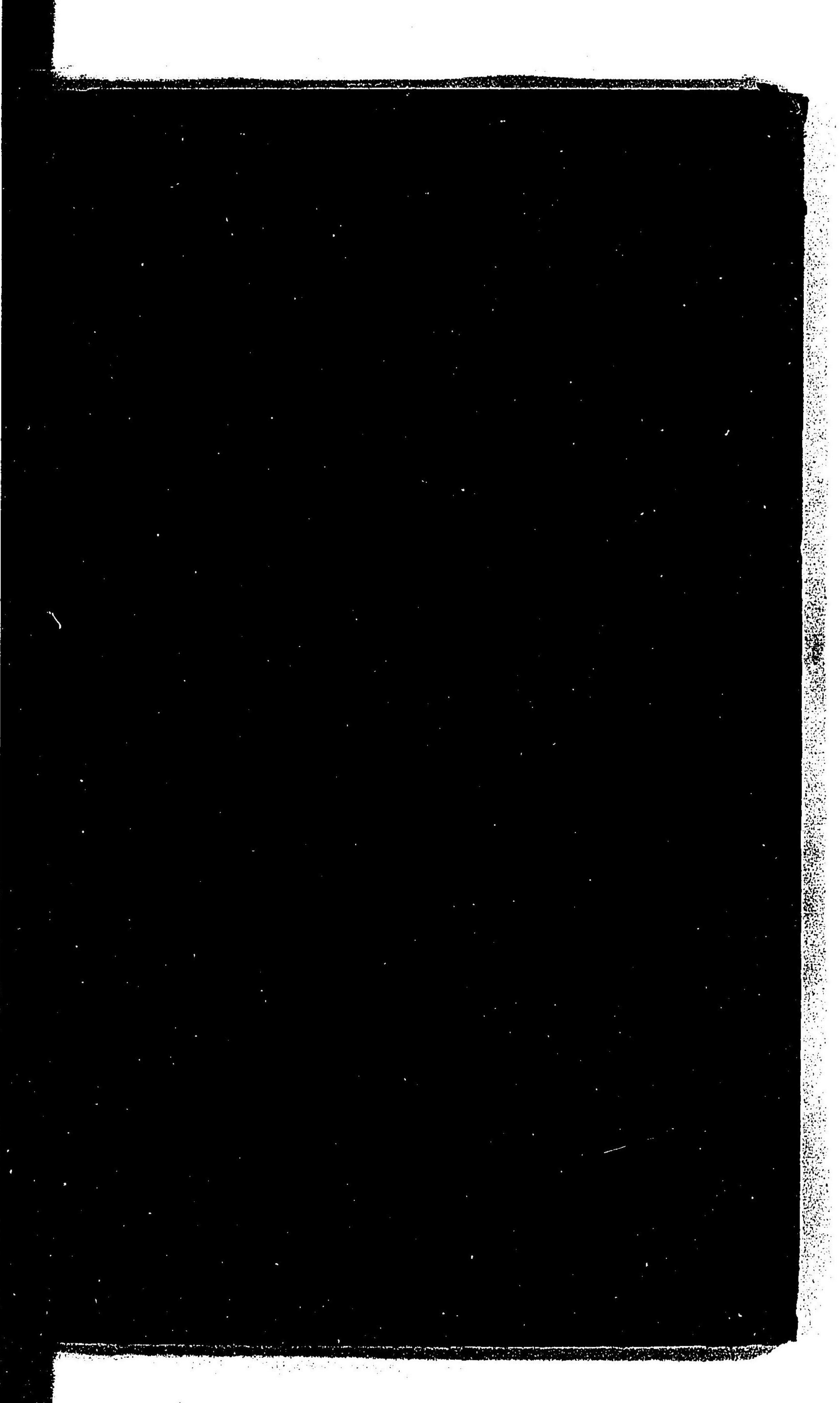
全一冊袖珍美本 正價參拾錢 郵稅六錢

天に春花秋葉の文あり、人間亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騒ぐ。其の錦心、絳腸吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子に在り。才華爛熳、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たること、言を俟たず。天下文を好むの士、願くば本を備へて讀誦に資せられんことを。(博文館藏版)



45  
316







084930-004-1

45-316

樗牛全集

高山 樗牛/著

M37-39

DBB-0220





241130